

問題生徒の理解と指導に関する研究

——非行化の原因と善導について——

目 次

第 1 部 研究の目的と計画

I 研究の趣旨	1
II 研究の目的	2
III 研究の計画	2
(1) 研究の計画	2
(2) 非行の意味	2

第 2 部 非行生徒の性格特性と親子関係

I 調査の目的	4
II 調査の方法	4
1. 調査の対象	4
2. 調査実施期間	4
3. 実施した検査	4
4. 調査結果の処理	8
III 非行生徒の性格特性	8
1. 類型別比較について	8
2. 性格特性の傾向	9
3. 性格特性内の事例の集まりについて	10
4. 観察による性格の特徴	15
5. まとめと考察	17
IV 非行生徒を生む親子関係の分析	19
1. 危険な父子関係	19
2. 危険な母子関係	23
3. 親子関係の実態	28
4. まとめと考察	30
V 性格特性と親子関係との関連	31
1. Ag (攻撃的) と親子関係	32
2. R (のんき) と親子関係	33
3. O (回帰性傾向) と親子関係	34
4. N (神経質) と親子関係	35
5. まとめと考察	35

第 3 部 非行化傾向のなくなった生徒の事例

I 小学校で非行化していたが、中学校でなくなった生徒の事例	37
II 非行グループを離れ、非行化傾向のなくなった生徒の事例	46
III まとめと考察	54

第1部 研究の目的と計画

I 研究の趣旨

最近子どもに関する問題の中で青少年の非行化問題は、教育的にも社会的にも大きな問題となっている。特に、中学生の非行はその数においても、質においても、憂慮すべき状態にある。

子どもの非行についてその動機、内容、家庭事情等を分析し、報告されているところによると、非行の低年齢化、集団化、粗暴化、中流家庭の少年犯罪の増加、動機なきせつな犯罪の増加、累犯少年の増加、都市集中化等がおもな特徴となっている。

当教育研究所であつかった非行のある子どもの教育相談をとおして考えられることは、わずかな動機や誘いがあると簡単に非行へ走ったり、不良行為を行なったりするということである。このことは子どもたちが非常に不安定な状態にあるといえよう。さらに気づくことは、非行は決して偶然に行なわれたのではないということである。一見矛盾しているようであるが、非行のある子どもの生育史、子どもをとりまく環境、親子の愛情などをつぶさに調べてみると非行へ走りやすい性格や不良行為を起こしやすい性格は、徐々につくられてきたということである。非行への傾向が親や教師の気づかないうちに形成され、わずかな動機や誘いでも容易に応ずるような準備態勢がつくられている。

非行へ走る原因について、これまでいろいろな立場の人たちによって研究されてきたし、現在なお多方面から非行原因を究明する研究が続けられている。人間の行為および不良行動の原因究明に当たっては身体的および精神的機能の連結点、および人と環境との相互作用の中に視点をおくべきものと考えるが、動機が複雑であり、行動が多様であるから原因究明へのせまり方は多面的に行なわなければならない。

非行の原因は複雑な要因がからみあって相互に作用しているので、原因の解決をいよいよ困難ならしめている。解決に当たっては、たとえ素質的に問題があるにしても、できるだけ不良な環境的要因を改善したり、除去することにつとめることである。それと同時に将来に向かって個人の善導にじゅうぶん力を注ぐべきである。

従来、非行問題についての考え方や対策はさまざまするとそれぞれの立場によって、主として個々の経験やかんによることが多く、またせまく自分たちの地域や学校や機関に限っており、基礎的研究はもちろんのこと、協力体制をもち、組織的、有機的に活動を展開していくことは少なかったのではないかと考える。元来、非行対策は消極的には非行のある子どもの更生指導、積極的には青少年全体の健全育成の両面をもつものである。しかし、いずれの場合にあつても非行行為そのものが問題なのであって、人間そのものではない。

学校における非行のある子どもまたは問題の子どもの指導は、生活指導全体からみるとその一部分にしかすぎないのであるが、現状ではさまざますると生活指導即問題の子どもの指導の感を抱かせている。このことは、問題の子どもの指導がむずかしいことを示すものであり、また一面問題の子どもの指導が生活指導の中にしっかり位置づけられて、効果的な指導がじゅうぶんなされていないことをうらづけるものである。問題の子どもの指導は個人指導だけでは効果を期待することはできない。学校経営、学校経営の中に正しく位置づけられて、綿密な指導計画のもとで指導が行なわれることがたいせつである。

なお、家庭や地域、関係機関などの相互の連絡や援助の必要なことは改めていうまでもないことである。

以上の趣旨によってこの研究を進めていくのであるが、問題の解明に当たって、まず一般的に非行生徒を理解し、その問題点を分析し、具体的な個々の問題を事例研究的な方法をとおして、より具体的に問題を理解し、指導の方法を導きだしていくことがたいせつではないかと考える。

II 研究の目的

同じような生活環境にある子どもが、なぜあるものは非行化し、あるものは非行化しないか、その原因を明らかにし、また、非行化傾向のなくなった生徒の事例を研究し、生徒指導の方法について考察する。

III 研究の計画

(1) 研究の計画

非行生徒の理解と指導の問題を解決するために、次の二つに分けて研究を進めることにした。

① 非行化の要因について、調査結果にもとづき究明する。

ここでは主として、非行化の要因のうちでも非行に積極的意味をもつ人格的要因、家庭的要因を分析し、両者の関連について検討する。

② 非行ある生徒の善導に関しては、個々の事例を通して、より具体的に指導上の問題点を理解し、一般的な指導方法につき考察する。

(2) 非行の意味

非行は問題行動の一部分である。問題行動は社会のもっている行動基準からいじりしく逸脱した行動で、異常行動または不適応行動とも言われている。問題行動を示す子どもを問題児といっているが問題児の概念はじゅうぶんに確立していない。非行を行なう子どもは狭義の問題児と考えられている場合もある。問題児は大別して非社会的行動を示す問題児と、反社会的行動を示す問題児とに分けられる。非社会的行動は、自己または他人の人格を傷つける行為をする性癖のないかぎり是非行とは言えない。また反社会的行動はすべて非行であるかという点、必ずしも非行とはいえない。非行とはこのように限界のはっきりしない内容も一定しない行動様式である。

子どもの示す行動内容が、社会のもっている価値基準、すなわち法律、規則、道徳などに適応しなかったり、それにもとづいて社会に悪影響を及ぼしており、悪影響を受けた人やまたはそれ以外の人から非難されるような場合に非行を問題にすることができる。少年法の規定に触れる行為は非行である。しかし、少年法上の非行少年ではないが、怠学、家出、不道德な者との交際、飲酒、喫煙などを行ない、適切な指導を欠けば、反復され犯罪に陥いるような行為を行なう状態が持続的・習慣的である場合、不良行為少年ともいわれるが、やはり、非行と解している。警察の補導の対象となっている。

子どもは、¹⁾ 成長の過程において、いろいろな行動形態をとり、多少の動揺はまぬがれないと考える。生活環境 ける極めて誘惑的な状況において、軽い程度の盗み、学校のする休み、反抗、粗暴な行動などを行なったが、間もなくこのような小さな罪を犯さないように成長した子どもは、たとえ法に触れておったとしても、真に非行のある者ではないと考える。

本研究で非行の意味については、上記のように考えているが、要約すると、

非行少年

犯罪少年………罪を犯した 14 才～20 才未満の少年

触法少年………14 才未満で刑罰法令に触れる行為をした少年

ぐ犯少年………保護者の監督に服しない性癖がある，家によりつかないなどの事由で，将来
犯罪少年となるおそれのある少年

不良行為少年 犯罪少年，触法少年，ぐ犯少年ではないが，飲酒・喫煙などを行ない，自己
または他人の徳性を害する行為をしている少年

以上はいずれも補導の対象になっている。

第2部 非行生徒の性格特性と親子関係

I 調査の目的

同じような生活環境や知能程度の中学校の非行生徒と非行化しない生徒との間には、性格特性や親子関係にどのような違いがあるかを明らかにする。

II 調査の方法

1. 調査の対象

(1) 対象の生徒

a 非行生徒（非行群）

イ 家庭状況がよくなく、知能程度の低いもの（A群）……………20名

ロ 普通の家庭状況で、知能程度の高いもの（B群）……………10名

b 非行のない生徒（正常群）

ハ 家庭状況がよくなく、知能程度の低いもの（a群）……………20名

ニ 普通の家庭状況で、知能程度の高いもの（b群）……………10名

ここでいう「家庭状況がよくない」とは、次の場合に該当するものをいい、「普通の家庭状況」とはこれに該当しないものをいう。

1) 貧困のため生活保護法の適用を受けているか、またはそれに近い生活困窮家庭。

2) 親の死、別居、離婚、家出、服役等によって家族構成が破壊されている家庭。

また知能程度の低いものとは知能偏差値50以下、知能程度の高いものとは知能偏差値50以上とする。

(2) 非行の事実 単独または集団で窃盗、暴力行為等を行なったもの。

(3) 対象生徒の学年 中学校2年生、3年生

(4) 対象生徒の抽出 研究協力校（中学校2校）の学級担任教師による

抽出に当たり、性別、年令、知能程度、学年、家庭状況、地域環境等について同じようなものを組合わせた。

2. 調査実施期間

この研究の期間は昭和38年4月より昭和39年1月までの間に計画実施し、まとめたものである。

3. 実施した検査

(1) 矢田部・ギルフォード性格検査（Y-Gテスト）

生徒の性格を多角的総合的には握ることができ、問題生徒の発見および問題の検出、更に生活指導・学習指導に有力な手がかりを得られる検査であると認められている。この性格検査は性格特性について12の尺度が設けられ、各尺度は10項目の質問事項からなりたち全部で120項目で

ある。結果は尺度別の得点を基準表にもとづいて標準点に換算しプロフィールで表わす。

矢田部・ギルフォード性格検査プロフィール

情緒的安定	{	抑うつ性小 D	1	2	3	4	5	D 抑うつ性大	{	情緒不安定
		気分の変化小 C	1	2	3	4	5	C 気分の変化大		
		劣等感小 I	1	2	3	4	5	I 劣等感大		
		神経質でない N	1	2	3	4	5	N 神経質		
社会的適応	{	客観的 O	1	2	3	4	5	O 主観的	{	社会的不適応
		協調的 Co	1	2	3	4	5	Co 非協調的		
非活動的	{	攻撃的でない Ag	1	2	3	4	5	Ag 攻撃的	{	活動的
		非活動的 G	1	2	3	4	5	G 活動的		
非衝動的	{	のんきでない R	1	2	3	4	5	R のんき	{	衝動的
		思考的内向 T	5	4	3	2	1	T 思考的外向		
内省的	{	服従的 A	5	4	3	2	1	A 支配性大	{	内省的でない
		社会的内向 S	5	4	3	2	1	S 社会的外向		
非主導的	{								{	主導権を握る

(数字は標準点をあらわす)

- S 社会的内向……………恥ずかしがり、隠れん性、社会的接触をさける傾向
- T 思考的内向……………冥想的、反省的、自己又は他人を分析する傾向
- D 抑うつ性……………陰気、悲観的気分、罪悪感の強い性質
- C 回帰性傾向……………いちじるしい気分の変化、おどろきやすい性質
- R のんきさ……………氣がるな、のんきな、活発、衝動的な性質
- G 一般的活動性……………活発な性質、身体をうごかすことが好き
- A 支配的でないこと……………社会的指導性のないこと、服従的
- I 劣等感の強いこと……………自信の欠乏、自己の過小評価、不適応感が強い
- N 神経質……………心配性、神経質、ノイローゼ気味
- O 客観的でないこと……………空想的、過敏性
- Ag 愛想のないこと……………攻撃的、社会的活動性、但しこの性質が強すぎると社会的不適応になりやすい
- Co 協調的でないこと……………不満が多い、人を信用しない性質

12尺度は因子分析の結果にもとづき、D-O情緒不安定性、Ag-R衝動性、G-T活動性、A-S主導性、C-N社会成熟性、I-Co不満性、R-T内省的の7つの性格要因に分類されている。検査の結果それぞれの尺度に得点が表示され、プロフィールに描かれる。このプロフィールの型から次のように判定されている。

① 平凡型<平均型>(A型)

平均的な状態を示す人で、万事につけて平均的、調和的で適応的であるが、積極的な診断はくだしにくく、臨床心理学的には問題の少ないタイプ。

② 右下り型(B型)

最も理想の人格の持主で、情緒的に安定し、社会的適応もよく、活動的で、対人関係もうまくいくタイプ。

③ 左寄り型(C型)

このタイプは安定消極型で、良いこともしなければ、悪いこともしない型と考えられる。

④ 左下り型（D型）

いわゆる、ノイローゼ型で、自らの内部に問題を持ちやすい適応力の弱いタイプであり、内向性・非活動的なため、学校などでは問題性が発見されにくい。積極的に不良化する心配はないが、無気力・受動的で、絶えず何かに悩まされており、自らの弱さのために止むを得ず問題行動を起こしてしまうタイプである。

⑤ 右寄り型（E型）

情緒不安定・社会的不適応・活動的・外向的で、パーソナリティーの不均衡が直接外部へあらわれるものであり、このため反社会的行動に出やすく、環境が悪いと非行に走りやすい者のタイプ。非行の早期発見上とくに注意を要する者とされている。

この調査に用いられたテストは、矢田部・ギルフォード性格検査（中学校用）である。

(2) 親子関係診断テスト

このテストの作成者である品川夫妻は、テストの意義目的について次のように説明している。

人格は人間対人間の交流のうちに形成される。人間関係のうちで最も大きな役割を果たすのは、子どもの生活の中核となり、心のよりどころとなる親と子の相互関係にほかならない。したがって子どもを正しく理解するためには単にその性格を探り、能力を測定するだけではふじゅうぶんで、かれらがどのような親子関係の中で生育してきたか、また現在どのような交流関係をもっているかを解明する必要がある。このように親子関係の診断は、子どもの個性や行動がいかなる要因に由来するかを明らかにする上に大きな役割を果たすわけである。

問題項目は親の望ましくない5つの特徴的な態度、すなわち拒否、支配、保護、服従、矛盾不一致に分類してある。さらに5つの態度をそれぞれ2つの型に分けて、この10の型に各20問の質問を割り当てている。

この型は次のようなものである。

拒否的態度

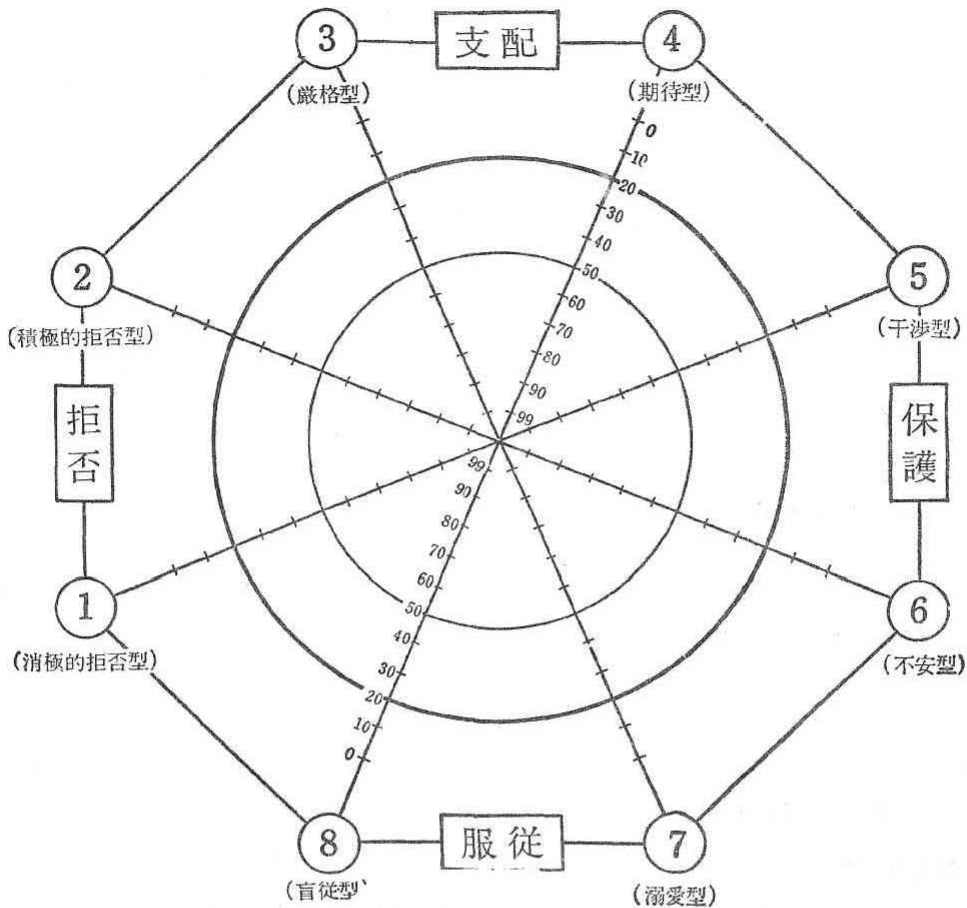
- イ 消極的拒否型：子どもに対する無視、放任、無関心、不信用、悪感情、不一致感などを示す親の態度。
- ロ 積極的拒否型：子どもに対する体罰、虐待、威嚇、屈辱、過酷な要求、保護養育の責任放棄などを示す親の態度。

支配的態度

- ハ 厳格型：子どもに対する愛情はあっても、常に厳格、頑固、強制などの態度をとり、命令、禁止、批判で絶えず子どもを監督している親の態度。
- ニ 期待型：親の要求や野心を子どもに強要する態度で、子どもの素質、能力、適性、希望などを無視して、もっぱら親の要求する方向や水準に従わせようとする態度。

保護的態度

- ホ 干渉型：子どもをよりよくするために細々と世話をやき、出来るだけの助力や指図を与えようとする態度。
- ヘ 不安型：子どもの日常生活、学業、健康、交友関係、将来の進路などに、ほとんど無意味と思われる程の心配や不安を抱き、そのため必要以上の責任をとり、過度の援助や保護を与える態度。



型	父	母
9. 矛盾型		
10. 不一致型		

服従的態度

ト 溺愛型：子どもを側において相手をしてやることを何よりの楽しみとし、ささいなことに賞を与え、必要以上にかばってやり、悪いことに対しても味方になってやる態度。

チ 盲愛型：一切の権力を子どもにもたせ、親はどんな犠牲を払っても子どもの要求をいれる態度
矛盾・不一致的態度

リ 矛盾型：子どもの行動に対して、ある時は叱責したり、禁止したりしながら、またある時は見逃したり、奨励したりするような一貫性の欠如している態度。

ス 不一致型：両親の態度が一致せず、たとえば父親は拒否的であり、母親は保護的であるとか、あるいは母親が支配的であり、父親が服従的であるかで、子どもが両親から異なった取り扱いを受けている親の態度。

このテストの各類型には10項目の問題があり、テストによって得られた粗点は、各類型ごとにパーセンタイルに換算される。なお、このテストの手引書によれば、親の態度をたてとよこ（東西南北）の

軸の上にあらわし、中心からいずれかの方向に遠ざかるに従って態度が悪くなるわけで、その程度がパーセンタイルの目盛りであらわしてある。つまり中心は99パーセンタイルであり周辺にすすむに従って低いパーセンタイル得点となっている。50パーセンタイルが中心であるが、それは典型的というのではなく、普通という意味である。中心(99パーセンタイル)に近いほどよいわけである。20パーセンタイル以下は危険地帯にはいり、20から40パーセンタイルまでは準危険地帯である。

この調査に用いられたテストは、田研式親子関係診断テスト(児童・生徒用)である。

4. 調査結果の処理

矢田部・ギルフォード性格検査、親子関係診断テストにおいて無答の問題項目については0点を配した。そのほかは手引書による。

Ⅲ 非行生徒の性格特性

非行生徒の性格特性を明らかにするために、調査対象の非行群・正常群に矢田部・ギルフォード性格検査を行ない、その結果について検討する。

1. 類型別比較について

非行群・正常群の類型別比較を示すと表1のとおりである。なお、各類型とそれに対応する性格型、および類型の記号も示すことにする。

表1 類型別比較

群	類型	A(平凡普通型)	B(安定積極型)	C(安定消極無力型)	D(不安定積極不適応型)	E(不安定積極非行型)	計	
非 行 群	A	8	3	2	1	6	20	30
	B	4	2	0	1	3	10	
正 常 群	a	10	3	1	6	0	20	30
	b	2	4	2	2	0	10	
計		24	12	5	10	9	60	(実数)

注) A型=A+A' (B以下同じ)

類 型	性 格 型	記 号		
		典 型	準 型	亜 型
平 均 型	平 凡 普 通 型	A	A'	A''
右下がり型	安 定 積 極 型	B	B'	B''
左 寄 り 型	安 定 消 極 無 力 型	C	C'	C''
左下がり型	不 安 定 消 極 不 適 応 型	D	D'	D''
右 寄 り 型	不 安 定 積 極 非 行 型	E	E'	E''

両群で大差のない類型はA型（平凡型）・B型（安定積極型）・C型（安定消極無力型）である。A型（平凡型）は両群とも各群内では最も多く、非行群でも40%にも達している。この型の人 は平均的な状態を示す人で、万事につけて平均的・調和的で適応的であり、臨床心理学的には問題の少ないタイプである。非行群にこの型が多く認められたことは、非行生徒の中に性格的にいて普通のものが多くいるということを示すものである。

E型（非行型）は非行群に多く、D型（不適応型）は予想に反し正常群に多かった。

E型（非行型）のものは情緒不安定・社会的不適応・活動的・外向的で、パーソナリティーの不均衡が直接外部へあらわれるものであり、このため反社会的行動に出やすいタイプである。

2. 性格特性の傾向

12の性格特性について非行群・正常群を比較し、それぞれの特性を明らかにしたものが表2である。

表2 性格特性の傾向

群	尺度	Co	Ag	O	N	I	A	G	R	C	D	T	S
非 行 群	A	60	67	60	59	62	57	55	64	64	55	52	59
	B	33	36	34	33	27	26	33	38	33	29	23	25
	① 計	93	103	94	92	89	83	88	102	97	84	75	84
正 常 群	a	64	53	65	54	59	62	66	60	62	63	61	59
	b	31	28	28	29	25	31	26	28	25	23	26	31
	② 計	95	81	93	83	84	93	92	88	87	86	87	90
①計-②計		-2	22	1	9	5	-10	-4	14	10	-2	-12	-6

（標準点合計）

※ 12の性格特性の内容については検査用紙に記載されてあるものによる。

(1) 両群を比較してみると、

非行群に著しい特性は、Ag（攻撃的）、R（のんき）、C（回帰的傾向）、N（神経質）であり、正常群の特性は、T（思考的内向）、A（服従的）である。

両群で差の少ないものとしては、O（主観的）、Co（非協調的）、D（抑うつ性大）などである。これらの特性については非行生徒も非行化しない生徒もあまり変わらないことが考えられる。

(2) 家庭状況がよくなく、知能程度が低い生徒の事例について、A群（非行群）、a群（正常群）を比較すると表3に示すとおりである。

表3 Y-Gテストによる性格特性の順位

群	尺度	Co	Ag	O	N	I	A	G	R	C	D	T	S
A 群		60	67	60	59	62	57	55	64	64	55	52	59
		⑤	①	⑤	⑦	④	⑨	⑩	②	②	⑩	⑬	⑦
a 群		64	53	65	54	59	62	66	60	62	63	61	59
		③	⑫	②	⑪	⑨	⑤	①	⑧	⑤	④	⑦	⑨
標準点差		-4	14	-5	5	3	-5	-11	4	2	-8	-9	0

※数字は標準点、○内は順位を示す。

A群（非行群）の特徴は Ag（攻撃的）・R（のんき）・N（神経質）であり、a群（正常群）では G（一般に活動的）・T（思考的内向）が特徴である。

(3) 普通の家庭状況で知能程度が高い生徒の事例について、B群（非行群）b群（正常群）の性格特性の順位を表4に示すと

表4 Y-Gテストにおける性格特性の順位

群 \ 尺度	Co	Ag	O	N	I	A	G	R	C	D	T	S
B 群	33 ④	36 ②	34 ③	33 ④	27 ⑨	26 ⑩	33 ④	38 ①	33 ④	29 ⑧	23 ⑫	25 ⑪
b 群	31 ①	28 ⑤	28 ⑤	29 ④	25 ⑩	31 ①	26 ⑧	28 ⑤	25 ⑩	23 ⑫	26 ⑧	31 ①
標準点差	2	8	6	4	2	-5	7	10	8	6	-3	-6

※ 数字は標準点，○内は順位を示す。

両群の標準点の差によりB群（非行群）は、R（のんき）、Ag（攻撃的）、C（回帰性傾向）、G（一般に活動的）等において、b群（正常群）はS（社会的内向）、A（服従的）等において他の群と区別することができる。

以上のことから明らかになった性格特性は

非行群 攻撃的，衝動的な性質，回帰性傾向，神経質

正常群 物事をよく考えること，支配的でないこと

また，家庭状況がよくなく，知能程度が低い生徒の場合では

非行生徒 攻撃的，衝動的，回帰性傾向，神経質

非行化しない生徒 物事をよく考える，活動的

普通の家庭状況で知能程度の高い生徒の場合では

非行生徒 攻撃的，衝動的，回帰性傾向，一般的活動性 など一般に外向的で

非行化しない生徒 社会的内向，支配的でないこと，思考的内向 など一般に内向的

であり，それぞれの特徴になっている。

3. 性格特性内の事例の集りにについて

非行群・正常群ではどのような性格特性をもつ事例の集りであることを明らかにする。

これまで「性格特性の傾向」について検討した結果，両群にはそれぞれかなり特徴のあることがわかった。ここでは各性格特性間で積極面をもつ事例，消極面をもつ事例の集りを比較し，両群の性格特性を事例によって明らかにしようと試みるのである。表5は性格特性内の事例の集りを示したものである。

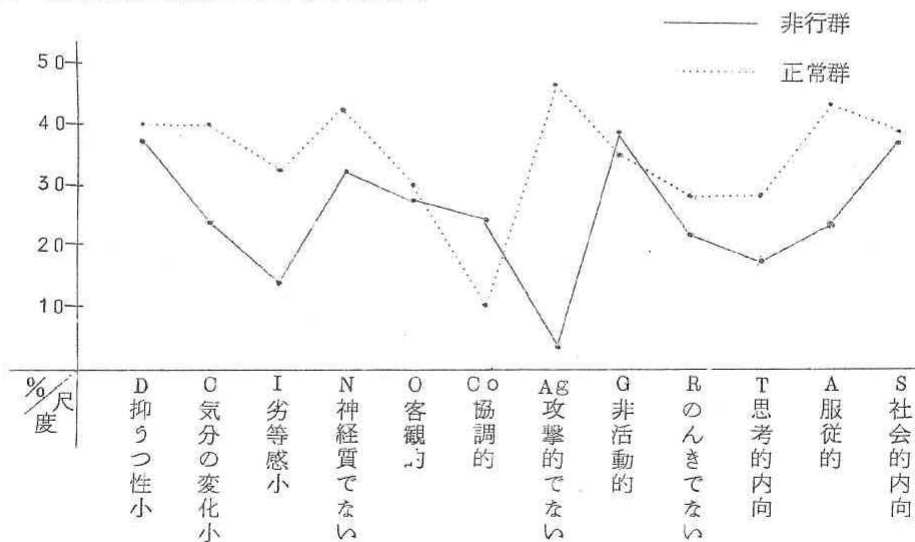
表 5 性格特性内の事例

群	標準点	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
非 行 群	1	4 (13)	0 (0)	2 (7)	2 (7)	2 (7)	3 (10)	0 (0)	4 (13)	2 (7)	3 (10)	1 (3)	4 (13)
	2	7 (24)	7 (24)	2 (7)	8 (27)	6 (20)	4 (13)	1 (3)	7 (24)	4 (13)	12 (40)	11 (37)	10 (33)
	3	11 (36)	13 (43)	22 (73)	9 (30)	12 (40)	11 (37)	17 (57)	9 (30)	8 (27)	10 (33)	11 (37)	6 (20)
	4	8 (27)	8 (27)	4 (13)	9 (30)	7 (24)	10 (33)	10 (33)	8 (27)	14 (47)	3 (10)	4 (13)	8 (27)
	5	0 (0)	2 (7)	0 (0)	2 (7)	3 (10)	2 (7)	2 (7)	2 (7)	2 (7)	2 (7)	3 (10)	2 (7)
正 常 群	1	4 (13)	1 (3)	4 (13)	3 (10)	1 (3)	1 (3)	2 (7)	3 (10)	1 (3)	2 (7)	0 (0)	3 (10)
	2	8 (27)	11 (37)	6 (20)	10 (33)	8 (27)	2 (7)	11 (37)	7 (24)	7 (24)	18 (53)	7 (24)	8 (27)
	3	11 (37)	10 (33)	13 (43)	11 (37)	12 (40)	19 (63)	11 (37)	13 (43)	16 (53)	10 (33)	10 (33)	8 (27)
	4	3 (10)	6 (20)	7 (24)	4 (13)	6 (20)	6 (20)	5 (17)	4 (13)	4 (13)	7 (24)	12 (40)	9 (30)
	5	4 (13)	2 (7)	0 (0)	2 (7)	3 (10)	2 (7)	1 (3)	3 (10)	2 (7)	1 (3)	1 (3)	2 (7)

※ 数字は実数，()内は総数に対する百分比

(1) 性格特性の消極面における事例の集りについて非行群，正常群を比較すると表 6 のとおりである。

表 6 性格特性の消極面における事例の集り

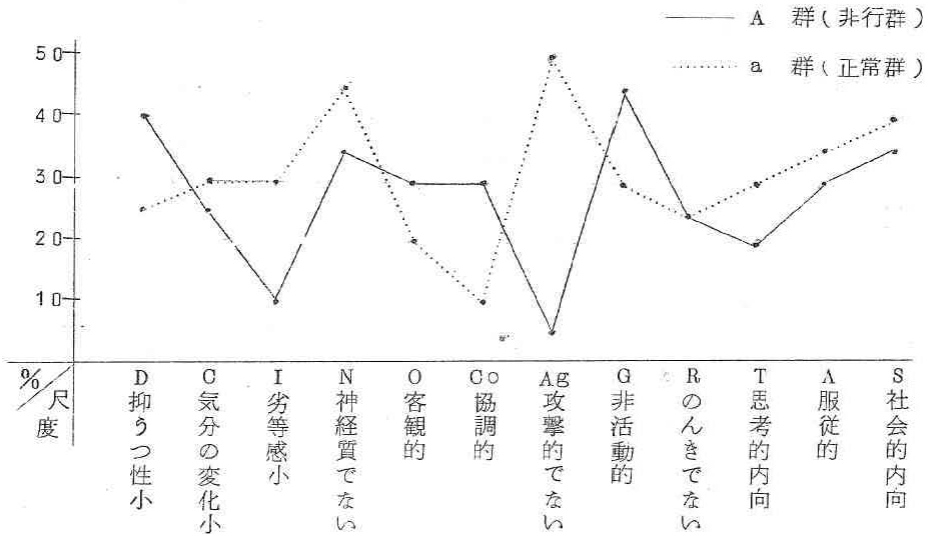


性格特性の消極面とは 12 の特性について，各特性の標準点 1 + 2 の事例（但し T・A・S では 4 + 5）をもってあてた。この結果，非行群には D（抑うつ性小）・N（神経質でない）・G（非活動的）・S（社会的内向）の特性をもった事例が多くあつまっている。しかし，正常群も同程度であることがグラフから読みとれるので，これらの特性については，非行群の特徴的な性格特性として認めるとはできない。非行群の Ag（攻撃的でない）・I（劣等感小）・O（気分の変化小）・A（服従

的)の事例が少ない。またR(のんきでない,衝動的な性質)・T(思考的内向)の特性をもつ事例も少ないことも注意すべきである。正常群では攻撃的でないもの,劣等感が小さいもの,服従的なものが多いことが特徴となり,協調的なものは非行群より少なくなっている。非行生徒の実態を観察すると,非協調的なものが多い(後述)。しかし,反面誘いかけられると容易に行動を共にする生徒も多いのである。

家庭状況がよくなく,知能程度の低いA群(非行群)・a群(正常群)について示すと(表7)

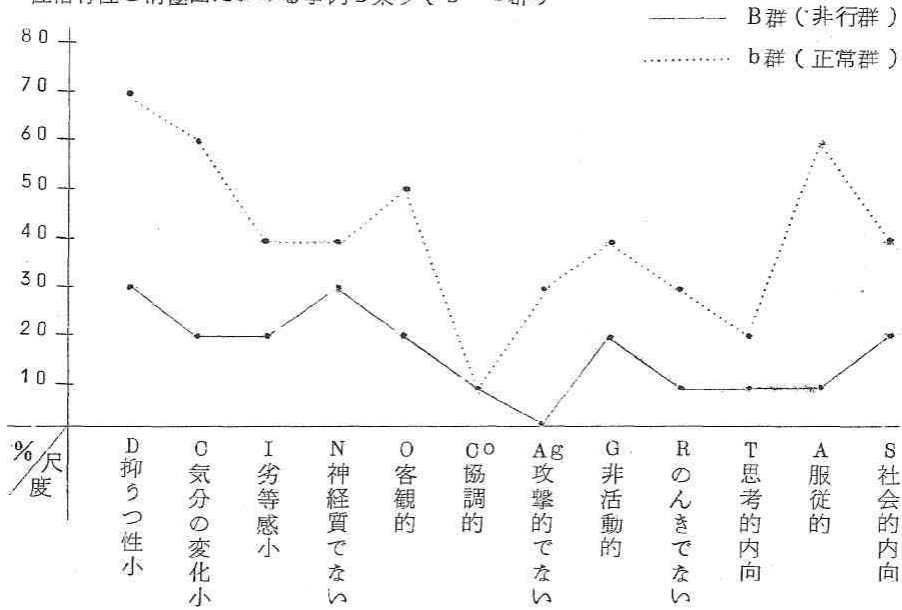
表7 性格特性の消極面における事例の集り(A,a群)



A群ではAG(攻撃的でない)・I(劣等感小)の特性をもつ事例が極めて少なく,反面Q(活動的)・D(抑うつ性小)・S(社会的内向)の特性をもつ事例が40%以上に達している。実際個々の事例をみても,態度に落ちつきを欠き,意欲もなく,動作は鈍く,ごちがちな。ちょこちょこして敏しうなようであるが,よく観察すると新しい事態に対する適応力や,自己統制に欠けているのである。a群との間に顕著な差をもち特徴となっている特性は,OO(協調的)・O(客観的)である。協調的であることについて事例によりその内容を見ると,他人の誘いに容易にのったり,おもしろそうだからということで集団万引をやったり,他人の手先になって行動をともにするような状態が多いのである。主体性を失った協調ということがうかがわれる。a群(正常群)ではAG(攻撃的でない)の特性をもつ事例が他の特性よりも多く,A群にくらべて非常に差のあることから,a群の特徴と考えられる。I(劣等感小)の特性についてもやはり,同様に特徴といえる。

普通の家庭状況で,知能程度が高い生徒の場合についてB群・b群により検討すると,表8のとおりである。

表8 性格特性の消極面における事例の集り (B・b群)

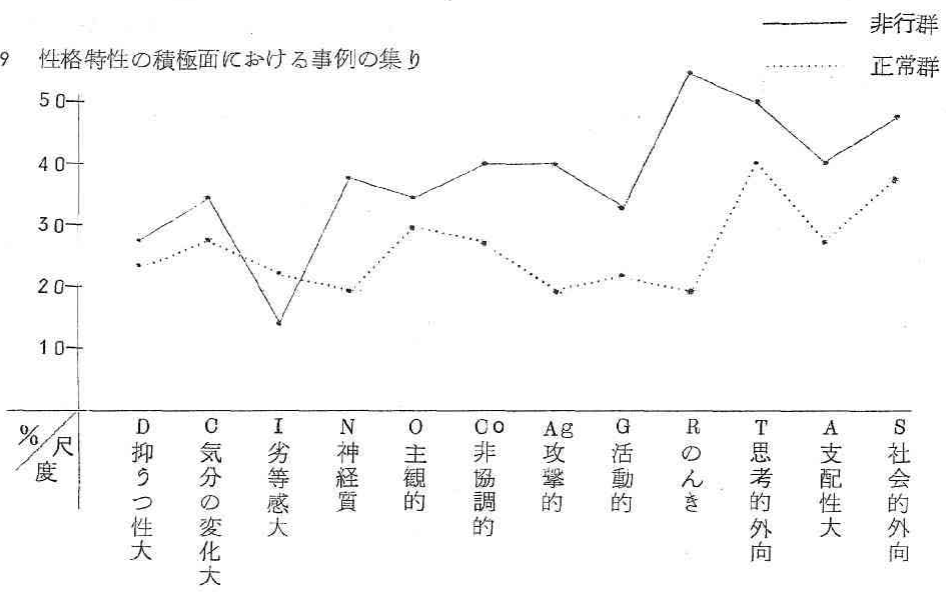


B群ではD (抑うつ性小)・N (神経質でない)の特性をもつ事例が多く、Ag (攻撃的でない)をもつ事例は全く認められない。またb群では、どの特性の事例でも非行群の事例よりも多く、とくにD (抑うつ性小)は70%、A (服従的)は60%、O (客観的)は50%に達している。B群との差の大きいものはD・C・A・O・Agである。

以上は非行群、正常群でどのような消極面の性格特性をもつ事例が集まっているのかについて検討したものである。非行生徒は情緒的に安定しているもの、適応のうまくいっているものが少なく、逆に非行化しない生徒は安定し、適応もうまくいっている。

(2) 性格特性の積極面の特性をもつ事例の集りについて非行群・正常群を比較すると表9のとおりである。

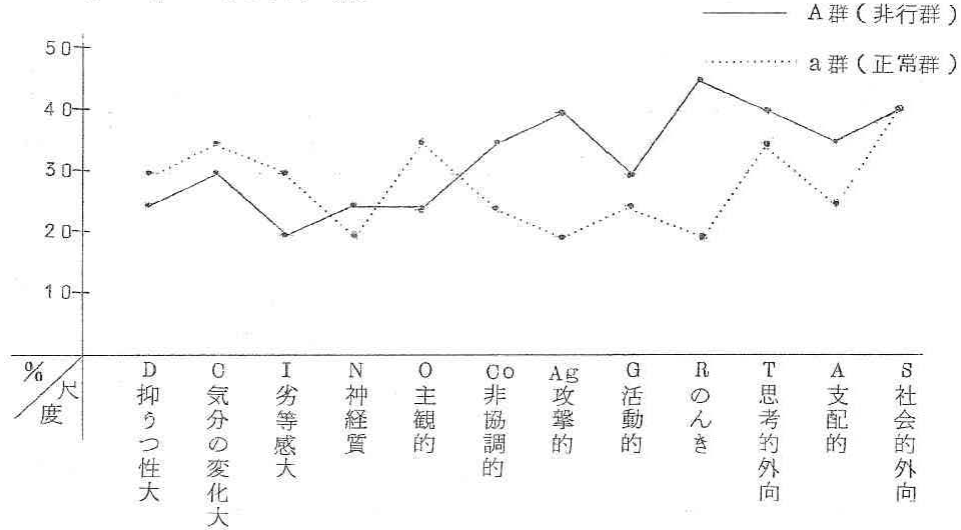
表9 性格特性の積極面における事例の集り



性格特性の積極面とは12の特性について、各特性の標準点4+5の事例（但しT・A・Sにおいては1+2）をもってあてた。この結果、非行群は全般的に積極面の特性をもつ事例が正常群よりも多くとくにR（のんき）・T（思考的外向）の事例は50%以上であり、Ag（攻撃的）・Co（協調的）・S（社会的外向）に関しても40%以上の多きを示している。両群の差の大きいものはR・Agであって、非行群に多い。すなわち非行生徒は衝動的・攻撃的であることで、事例によってもじゅうぶんうなづける。また正常群ではI（劣等感大）が非行群にくらべて多くなっており、すでに明らかになった性格特性の消極面においてもやはりI（劣等感小）が多かったことと関連して、一見疑問をいだかせるが、表5を見ると標準点3に該当する事例が非行群に極めて多く集まっていることによるのである。

次にA群（非行群）・a群（正常群）の各群について比較したものが、次の表10に示してある。

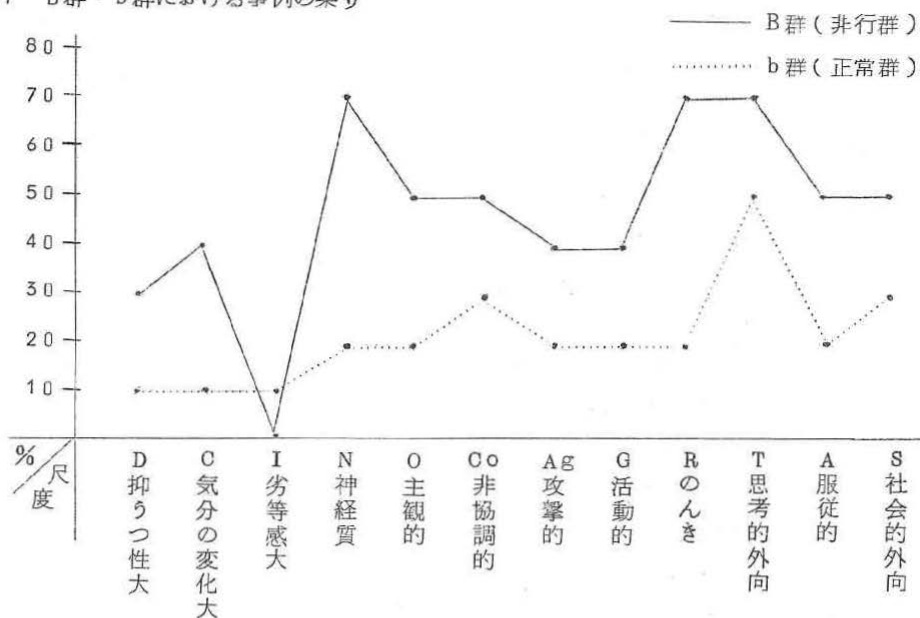
表10 A群・a群における事例の集り



A群ではI（劣等感大）の事例が少なく、R（のんき）・Ag（攻撃的）・T（思考的外向）・S（社会的外向）の特性をもつ事例が多い。a群ではO（回帰性傾向）・O（主観的）・T（思考的外向）が多いが両群での差はわずかである。したがって両群の特徴として認めることはできない。両群で差の大きいのはR・Agで、非行群の特徴といえよう。

B群（非行群）・b群（正常群）について比較した結果が表11に示してある。

表 11 B群・b群における事例の集り



まず、I (劣等感大)を除いて他のいずれの場合でも非行群が多い。とくにR・T・Nは70%、O・Co・A・Sは50%を示している。なお、R・Nは正常群と比較して非行群に顕著な特徴となっている。

これまで性格特性内における事例の集りについて述べてきたがこれを要約すると、多くの非行生徒が他人との接触において諸種の困難点をもっていることが判った。すなわち非協調的であったり、他人に対して敵意をもち、疑い深く、反社会的、攻撃的である。また、外向的であり、衝動的、無反省的、回帰性傾向が大きく、神経質であることが事例をとおして具体的に知り得たのである。

4. 観察による性格の特徴

非行生徒の性格の特徴を観察によっては握し、これまでテストによって明らかにされた性格特性を一層具体的に理解し、また、テストでは明らかにできなかった性格の特徴を検討する。観察は教師・親・児童委員 (民生委員) によってなされ、指導要録・観察記録・観察報告等を整理し、性格の特徴を知り得たのである。ここでは具体的に理解するために、家庭状況がよくなく知能程度の低い生徒で非行化した者と、普通の家庭状況で知能程度の高い生徒で非行化した者の場合について検討することにした。

(1) 家庭状況がよくなく知能程度の低い生徒で非行化した事例 (事例数20)

- ① 外観では服装・言語・態度などだいたいだらしがなく、粗暴な者が多い。
 - ② 指導要録の「行動および性格の記録」について「0」と評定されたものは、
- | | | | |
|---------|-----|------|-----|
| 基本的生活習慣 | 75% | 根気強さ | 70% |
| 自省心 | 70% | 指導性 | 70% |

Bと評定された項目で比較的多かったものは「公平さ」・「協調性」・「同情心」であり、Aと評定された項目は全くなかった。

(Aは特にすぐれたもの、または程度の著しいもの、Bは普通、Cは特に指導を要するものを意味する。)

③ 趣味・特技 少数の者がスポーツやはとの飼育と答えている。趣味や特技は大部分の生徒には、きまっているもの、継続的なものはない。

④ 教師の所見

- ・ 知能程度が低く、判断力の根拠が乏しいので誘発されやすい。
- ・ 他人に動かされやすい。主体性・自主性がない。
- ・ 他人からいわれたことについてことわりきれない。気が弱い。
- ・ 明朗で気持ちがよい。愛想がよい。
- ・ 正直・素直・温順。
- ・ はっきり自分の意見も言わず、行動につかみどころがない。
- ・ 根気強さなく長つゞきしない。あきっぽい。
- ・ 落ち着きがない。
- ・ 衝動的に粗暴な行動をする。
- ・ するくて、図々しい。
- ・ 無気力で依存的である。ぼんやりしている。
- ・ 気分がかわりやすい。
- ・ わがままで強情である。
- ・ 陰陰、陰気くさい。

これらの所見から非行生徒の性格の特徴は、①明朗で気持ちよいが気が弱い、②お人よしで他人に動かされやすく、自分で考えようとしない、③無気力であきっぽく根気強さがない、④衝動的行動⑤回帰性傾向などであって、つまり自分をコントロールすることに困難を伴うことが最も多く、その他自閉的・攻撃的なことも特徴となろう。

⑤ 親の見方

「どうも気持ちのはっきりしない子で……」「正直な子でいわれれば何でも、はい、はいといっ
てよくきく子」「気の小さい子」「根気がなくて……」「悪友に誘われても断わることができなくて」
などの親の声をきいて感ずることは、家庭でも気の小さい子、気持ちのよい子、根気のない子である。

(2) 普通の家庭状況で知能程度が高い生徒で非行化した事例(事例数10)

- ① 外観では服装・言語・態度など普通である。
- ② 指導要録の「行動および性格の記録」によると評定項目の評定は殆んどBである。
- ③ 教師の所見では

- ・ 自己を能力以上にみられたいという傾向がつよい。(自己顕示性)
- ・ 神経過敏で思いどおりにいかないと物事を投げ出す。(無力性)
- ・ 非常にわがままで気にいらないと不平不満をいう。
- ・ 主人公にならなければ他人に協力しない。
- ・ 人目をひく色彩やデザインの衣服を着用したり、突飛な行動をやり、奇声を発する。
- ・ 指導力があり遊びや、スポーツの中心となる。ボスのところもある。

これらの所見から非行生徒の性格の特徴は、社会的承認の欲求がつよいこと、自己中心性であること、神経質であることなどが考えられよう。

④ 親の見方

わがまな子、反抗心のつよい子という見方である。

以上教師や親の観察から考えられることは、さきに明らかになった非行生徒の性格特性である攻撃的・衝動的・回帰性傾向・神経質および思考が不活発なこと、支配性の大きいことなど、個々の事例の中で具体的には握できる。しかし、これらの性格特性以外に非行生徒の特徴として、明朗で気もちがよいが気が弱い、お人よしで他人に動かされやすく、自分で考えようとしない、無気力であきっぽく根気づよさがなく、社会的承認の欲求がつよすぎることなどが明らかになった。これらの性格の特徴が非行形成にどのように作用しているか究明することが必要であり今後の課題でもある。ところでやや速断のきらいはあるが非行形成についていうならば、対人関係におけるふんいき（不良仲間の誘惑にのったり、誰とでも気やすく交わるなど）と自律性の未発達・思考停止による人格の深層部に作用する不適応（善悪の判断がない、自己統制の困難、無反省的＝自己を問いつめない、などから起こる不適応行動）の二つが相互に働きあって非行形成にあづかっている、と考えられるのである。

5. まとめと考査

同じような生活環境や知能程度にありながら、ある者は非行へ走り、ある者は非行化しない。非行化し非行化しない要因を考えると、単に環境的な要因だけで非行の原因を問題とすることはできない。やはり、非行へ走る生徒の素質的な要因、とくに性格を考える必要がある。そこで非行生徒と非行化しない生徒との間には、性格の特徴にどのような違いがあるかについて、矢田部・ギルフォード性格検査によって検討した。その結果、性格類型については非行群・正常群とも普通型・安定積極型が多く（^⑩57%：^⑪63%）、両群で特色あるものは非行群は不安定積極非行型で、正常群は不安定消極不適応型であることが判った。次に性格特性では非行群で攻撃的・衝動的・回帰性傾向・神経質が特徴となり、正常群では思考的内向・支配的でないことが明らかにされた。しかし、テストでは質問紙法の限界から、性格の表層的な面が一般的傾向としてとらえられるけれども、生徒が果たして正しく答えてくれるかどうか、質問の意味を正しくとってまじめな態度で答えたかどうかが問題となる。そこでテスト結果から得た性格の一般的な傾向をそのまま非行生徒の性格の特徴とするには多少の疑問もあるので、性格特性の一般的傾向を具体的には握することが必要であると考えて、各特性にどのような事例が集っているかを検討し、両群の差異を明らかにしてきたのである。

矢田部・ギルフォード性格検査において非行に関する性格要因は、これまでも各方面で究明されている。非行に関する性格要因でとくに注意すべきは、A g - R（衝動性）・I - O o（不満性）・G - T（活動性）・O - N（社会成熟性）で、これらの要因で得点の高い者には指導上注意を要する。本調査の結果、非行生徒の性格特性で明らかになった特徴は、A g・R・O・Nであり、他の特性については更に検討の余地が残された。しかし、非行化しない生徒の性格特性で非行群とはっきり区別ができたT（思考的内向）・A（支配的でない）を性格の特徴とするならば、非行生徒の性格特性として、さきにあげたA g・R・O・Nのほか、T（思考的外向）・A（支配的）を加えることもできよう。

従来非行少年の性格の一般的特徴として明らかにすることが試みられてきた。これまで明らかにされた一般的特徴を参考としてあげると、

- ① 非行少年には著しい情緒障害があるといわれている。非行は人間関係の障害からくる緊張や圧迫感に対する感応形式であり、自己表現のひとつの変形されたものとみる。したがって非行にお

いては好ましくない環境にあつて、情緒障害という不適応現象を起こす個体そのものの素質的な傾向を注意しなければならないが、それとともに悪い環境条件が積み重なると、情緒障害の回復により性格の偏りが固定化していくことも考えねばならない。

- ② グリュック夫妻によると、「性格の一般的傾向として、情緒が容易に変わりやすく、衝動性が大きく、また、外向的で活発であると同時に、自己を統制する力に欠けている。他人に対しては意識的・無意識的な敵対衝動をもっており、怨恨や疑惑を抱きやすく、攻撃的破壊的拒否の態度が顕著である。さらに、一般に、不安定感・不安感は少ないし、失敗や敗退を恐れるところも少なく、しかし、同時に自分が認められたいという自己愛的傾向が強く、権威や社会に対しては、反抗的で、服従的なところがなく、両面価値的なところが大きい。また、精神障害の傾向があり非社会的・幼稚で適応性に欠ける向きがある。」と非行少年の性格について一般的特徴をあげている。

- ③ 少年鑑別所の調査結果によると、非行少年は、硬い人格の持主であり、感情生活が貧困であり精神は非常に未成熟である。感情面は幼稚で、不安定性が目立ち、愛情の阻害感をもっている。知的面では、ものごとの判断力に乏しく、内省力や自発性がないので、新しい環境への順応性が劣る。また、自己中心性が強いので、生活空間が狭く、興味の範囲が限られ、対人関係が少ない。

以上のことから非行少年の性格の特徴は、幼児的色彩の濃厚な性格をもち、性格形成の未成熟さをあらわしているものであり、情緒的未成熟といった、発達障害の一面を含んでいると考えられる。

性格特性がどのように非行形成に作用するかということは個々の事例によって違ってくる。正常なまたは優れた知能や性格をもっている生徒も非行に陥る場合があるし、逆に知能や性格の異常者であっても非行に陥らない場合がある。実際本調査の対象となった〇生徒（中学3年生男）は知能偏差値71、学業成績上、小学校では児童会長をつとめ中学校でも学級委員長であつて、指導力・企画力など優れた性格の特徴をもっている生徒であつたが、非行グループのリーダーとなつて約20万円相当の空巣・万引をやり、犯行の計画・実施・処置等警察でさえも驚嘆したほどであつた。指導力・企画力が学級活動や生徒会活動にうまく活かされていたときは、彼は信望の厚い児童会長であり学級委員長であつた。逆に非行グループの中で指導力・企画力を活かして、非行グループのリーダーとなつた。〇生徒だけでなく知能程度が高く、良い性格をもつ生徒が学習に興味を失つて非行へ走つたり、性格的には何ら問題のない生徒であるが、知能が低いので学友についていけなく、学習意欲を失つて非行へ走る事例はかなりある。各自が出会う場面で、各自のもつ性格特性が非行形成へどのように作用し、意味をもつかを究明することが大切なのである。非行の原因について、その中のある要因に関心が向けられたり、それを重くみるようになると、いかにもそれが根本原因で、それによってすべてが説明できるように思われやすい。性格特性についても同様のことがいわれる。非行形成に意味をもつ性格特性を重くみることから、そのような性格特性をもつ普通の生徒に対して、あまりにも神経質になることが日常生徒と接している際にもよく見受けられることである。大切なことは性格特性を単に列挙したり、性格特性がどうかというのではなくて、一定の状況において、その人のもつ性格特性が、いかなる意味をもち、いかに作用するかということである。

Ⅳ 非行生徒を生む親子関係の分析

子どもの性格の構造に対して、のちのちまで影響を残すものは、両親の態度・愛情・誠実さである。それらが何らかの欠陥をもち、普通から逸脱しておれば容易に非行へ走りやすい性格を生み出すものとする。非行生徒の親と子どもの間、非行化しない生徒の親と子どもの間には、どのような人間関係があるかを明らかにするため、田研式親子関係診断テストで調査し、その結果について検討する。

このため手引書の判定基準にもとづき、各類型ごとに危険な関係にあるもの、準危険な関係にあるもの、普通の関係にあるものをそれぞれについて集計し、さらに非行群・正常群ごとにパーセントであらわした。表Ⅳの1は生徒からみた父親の態度を示したものである。

表Ⅳの1 子どもからみた父親の態度

関係	類型	消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	溺 愛	盲 従	矛 盾	不一致
危 険	非行	9 (36)	8 (32)	9 (36)	5 (20)	6 (24)	3 (12)	7 (28)	5 (20)	6 (24)	11 (44)
	正常	6 (24)	2 (8)	1 (4)	1 (4)	0	0	3 (12)	6 (24)	4 (15)	8 (31)
準危険	非行	8 (32)	6 (24)	3 (12)	3 (12)	4 (15)	7 (28)	4 (15)	5 (20)	5 (20)	9 (36)
	正常	2 (8)	0	9 (34)	3 (12)	4 (15)	7 (27)	6 (24)	4 (15)	4 (15)	11 (42)
普 通	非行	8 (32)	11 (44)	13 (52)	17 (68)	15 (60)	15 (60)	14 (56)	15 (60)	12 (48)	3 (12)
	正常	18 (69)	24 (92)	16 (61)	22 (84)	22 (84)	19 (73)	17 (65)	16 (61)	18 (69)	7 (28)

数字は実数、()内は百分比
小数第一位で四捨五入

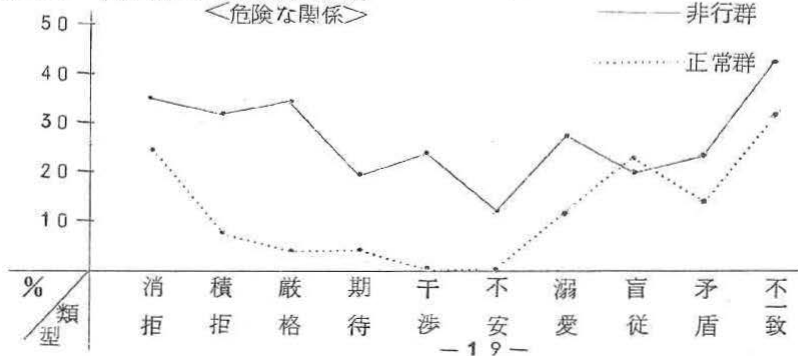
注・標本数……非行群 25事例
正常群 26事例

1. 危険な父子関係

表Ⅳの1の中にある危険な父子関係・普通の父子関係にある事例を比較・検討する。準危険な父子関係にある事例を考察の対象から除いたわけは、中間グループを除けば、一方のグループから他方のグループへ移動することは比較的少なく、より適切な資料となるものと考えたからである。比較・検討する際の着眼点は、危険な父子関係にある事例、普通の父子関係にある事例で、非行群と正常群のいずれにどのような類型が多いかということのみようとするものである。

表Ⅳの2は危険な父子関係にある事例について示した。

表Ⅳの2 子どもからみた父親の態度



盲従型のほかはいずれの類型も非行群に多く、とくに厳格・積極的拒否・干渉・不安などの類型において顕著な差を認める。すなわち父親の拒否的態度・支配的態度・保護的態度において父子間で危険な関係が著しい。なお、拒否的態度（消拒・積拒）・不一致の態度については、準危険な関係・普通の場合における場合と比べて、危険な関係における割合が高いことに注意すべきである。

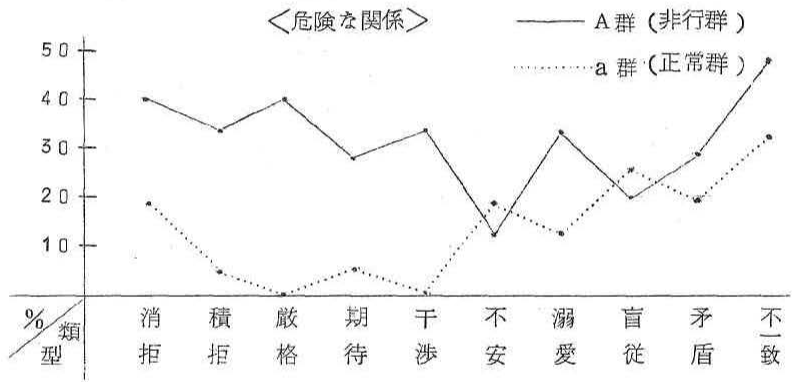
普通の父子関係について表Ⅳの1から、非行群はどの類型においても低いパーセントである。とくに拒否的態度・矛盾・不一致の態度はいずれも50%以下である。正常群との比較で非行群の特徴だと判別できる類型は積極的拒否（非行群44%：正常群92%）・消極的拒否（非行群32%：正常群69%）である。

次に基礎集団であるA・a・B・bの各群について比較・検討する。

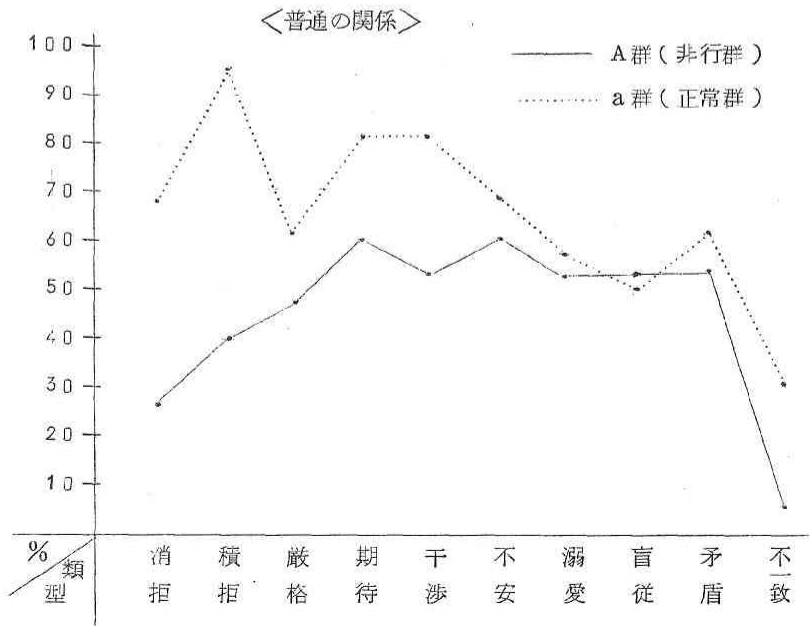
(1) 家庭状況がよくなく、知能程度が低い生徒の場合

危険な父子関係についてA群（非行群）・a群（正常群）を比較したものを表Ⅳの3に示した。

表Ⅳの3 子どもからみた父親の態度（A・a）



表Ⅳの4 子どもからみた父親の態度（A・a）



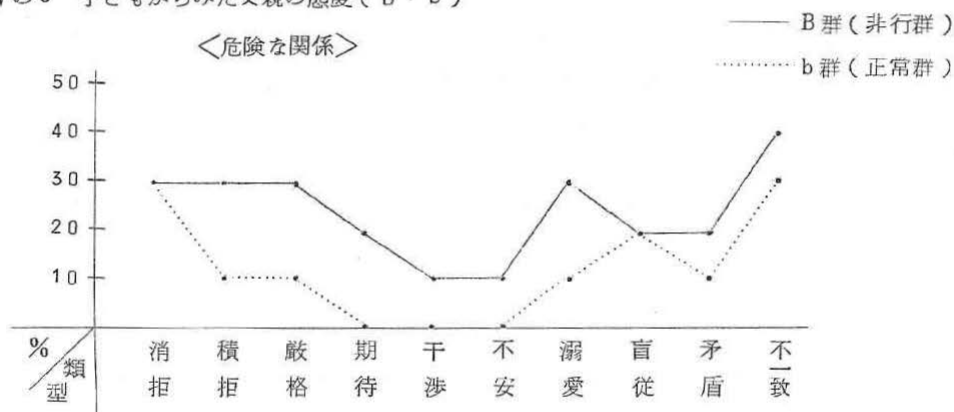
不安型と盲従型を除いては、いずれの類型も非行群のパーセントは高い。すなわち、非行群に危険な父子関係が多いのである。消極的拒否・厳格・不一致の類型は40%以上の高率である。非行群・正常群の違いは、厳格・干渉・積極的拒否・期待・消極的拒否・溺愛・不一致でかなりの差をもって非行群に危険な父子関係が多い。A群の生徒の父親について実際、事例に照らしてみても、些細な事で体罰を加えたり、父子で言葉をかわす時は小言か怒鳴り声という場合が多く、非行を行なった生徒は父親と殆んど話し合いの経験をもたないものがかかりあった。逆に、子どもの要求をいれてやる事が父親の役目というような態度で接する親もかなりあった。

普通の父子関係についてA群・a群を比較すると(表Ⅳの4)、盲従のほかはどの類型もa群に多く集っている。とくに積極的拒否の類型で好ましい態度をもつ父親はa群の94%もあり、非行群は40%で、正常群と非行群を明らかに判別するものである。また、消極的拒否・期待・干渉・不一致についても同様のことがいわれる。

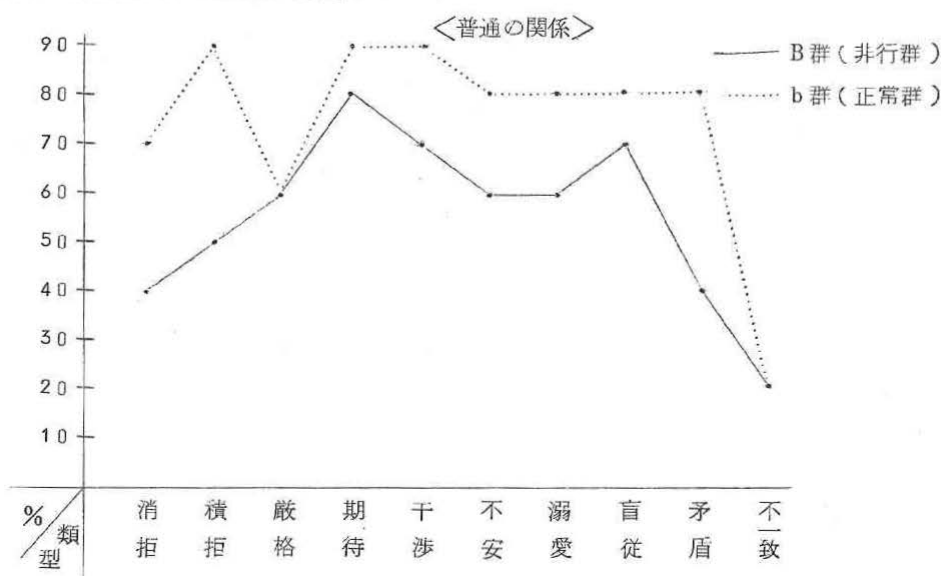
(2) 普通の家庭状況で、知能程度が高い生徒の場合

まず危険な父子関係についてB群(非行群)・b群(正常群)のパーセントを比較・検討する。

表Ⅳの5 子どもからみた父親の態度(B・b)



表Ⅳの6 子どもからみた父親の態度(B・b)



消極的拒否・盲従については同数、他の類型はいずれもB群（非行群）に危険な関係が多いことがわかる。積極的拒否・厳格・期待・溺愛・干渉などはB群に多い。これはA群の場合と同様である。普通の父子関係では両群とも事例数が多く、好ましい関係が父子の間に交流していると考えてもよいであろう。（表Ⅳの6）

これまで危険な父子関係・普通の父子関係について、非行群と正常群を比較・検討してきた。その結果、明らかになったことは、

非行群 厳格・積極的拒否・干渉・不安の類型で危険な父子関係にあるものが多い。

正常群 消極的拒否・積極的拒否の類型で好ましい父子関係にあるものが多い。

拒否の態度に関して、両群は明らかに区別されるのである。拒否の態度は親が子どもに対し、望ましい親子関係のために必要な程の愛情をもたないか、愛情の表現が拙劣で子どもに伝わらないという場合に起きるものである。親が子どもに対し愛情をもたないことは、おそらく特殊の場合を除いてはあり得ない。愛情の表現の問題になると親自身意識しなくても、非行群の事例でみる次のような場合は拒否の態度といえることができる。

① 子どもを無視したり、信用してやらないこと。

・今の子どもは自由のはきちがえだとして、子どもの要求を無視し、口うるさく小言をいう。（子どもは中2男、1年生から窃盗・喫煙・飲酒・暴力行為・脅迫等あり）

② 子どもに対しあまりにもきびしすぎることを。

・幼少の頃からなぐればわかるというしつけ方で、些細なことでも体罰を加えてきた。父をどう思うかという問に、なぐるから嫌いだ、とはっきりいっている。（中3男、非行グループの一人で暴力行為の直接実行者である。夏休み終了直後家出）

③ 子どもと話合うことなど殆んどなく、口を開くときは小言か怒鳴るときだけである。

・子どもは父と話合った経験はない、いつ怒鳴られるかとオドオドしている。学校にきているのが息抜きといった状態である。（中3男、非行グループの有力な窃盗実行者）

④ 子どもに対し無関心なこと。

・大学卒の父、働く意欲なくぶらぶらしている。子どもの行動や友人関係など全く知らず子どもの存在そのものにあまり関心がない。（中2男、空巢・放浪をかさねる）

⑤ 親が自分勝手に計画し、子どもに対し強要すること。

・非行生徒と手を切らせるため、子どもに相談することなく転校させたり、子どものいい分を聞こうとしない。（中3男、窃盗・家出を重ねる）

⑥ 子どもに対しいつも期待しすぎることを。

・子どもが何か要求すると、「親がこんなに苦労しているのに…、親の気持ちも知らないで……」といったりして、子どもの心を解放してやらない。（中3男、窃盗）

次に家庭状況がよくなく、知能程度の低い生徒の場合についてみると

A群（非行群） 厳格・積極的拒否・干渉で顕著な危険な関係を示し、期待・消極的拒否・溺愛・不一致もかなり危険な関係である。

a群（正常群） 積極的拒否・消極的拒否で顕著な好ましい関係、干渉・期待・不一致でも好ましい関係にある。

普通の家庭状況で知能程度が高い生徒の場合

B群（非行群）

危険な関係はB群よりも高率。とくに危険な関係が目立つものはない。

b群（正常群）

好ましい関係にある。拒否の態度で非行群よりも、はるかに好ましい関係にある。

2. 危険な母子関係

表Ⅳの7は生徒からみた母親の態度について示したものである。

表Ⅳの7 子どもからみた母親の態度

関係	類型 群	消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	溺 愛	盲 従	矛 盾	不 一 致
危 険	非 行	10 (37)	6 (22)	7 (26)	6 (22)	9 (33)	5 (19)	11 (41)	4 (15)	4 (15)	17 (63)
	正 常	6 (20)	3 (10)	5 (17)	1 (3)	4 (13)	1 (3)	8 (27)	6 (20)	3 (10)	14 (52)
準 危 険	非 行	9 (33)	9 (33)	8 (30)	4 (15)	5 (19)	10 (37)	5 (19)	6 (22)	10 (37)	6 (22)
	正 常	10 (33)	10 (33)	4 (13)	7 (23)	3 (10)	7 (23)	6 (20)	6 (20)	8 (27)	5 (19)
普 通	非 行	8 (30)	12 (44)	12 (44)	17 (63)	13 (48)	12 (44)	11 (41)	17 (63)	13 (48)	4 (15)
	正 常	14 (47)	17 (57)	21 (70)	22 (73)	23 (77)	22 (73)	16 (53)	18 (60)	19 (63)	8 (30)

数字は実数，（ ）内は百分比，小数第一位で四捨五入

注， 標本数……非行群 27事例

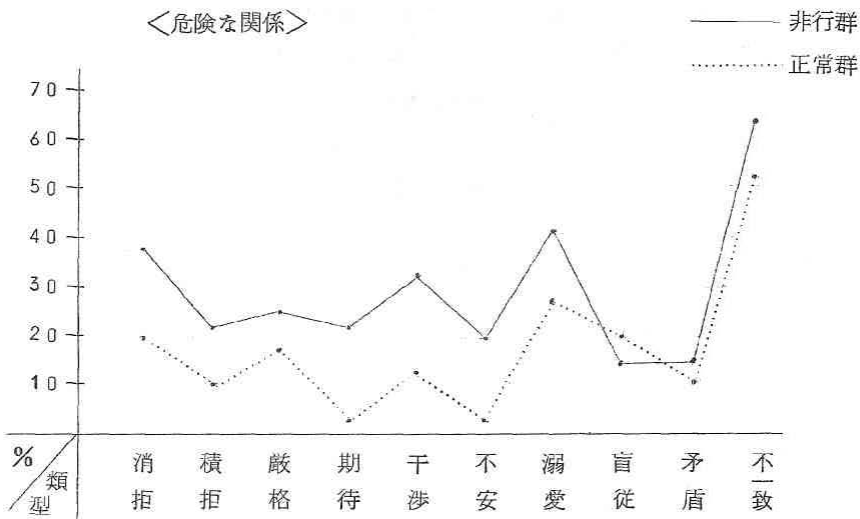
正常群 30事例

表Ⅳの7の中にある危険な母子関係・普通の母子関係にある事例を比較・検討する。父子関係の場合と同様に中間グループである準危険な関係を除くことにした。また，比較・検討の観点は非行群・正常群のいずれに，どのような類型が多いかをみようとするものである。

表Ⅳの8は危険な母子関係にある事例について示した。

表Ⅳの8 子どもからみた母親の態度

＜危険な関係＞



盲従型のほかはいずれの類型においても非行群に多いことがわかる。とくに消極的拒否(⑤ 37% : 20%)・期待(22% : 3%)・干渉(33% : 13%)・不安(19% : 3%)・溺愛(41% : 27%)などの類型において大きな差をもって正常群を上まわっている。不一致型(63% : 52%)が両群で他のどの類型よりも共通してとくに多いことは注意すべきである。不一致型の両親では、両親の子どもに対する態度が一致せず、子どもは2つの権威、2つの命令系統の間にはさまれ非常に不安定になる。本研究のように母親の態度が溺愛型・干渉型で、父親の態度が拒否的である場合には(表Ⅳの2参照)、品川夫妻によれば、子どもは反抗心がつよくなり攻撃的になりやすい。ときには、攻撃性をかくそうとして表面おとなしくしているものもあるが、場面が変わると人が変わったように著しく攻撃的となり残忍冷酷となって、非行を行なうものも多くみられる。

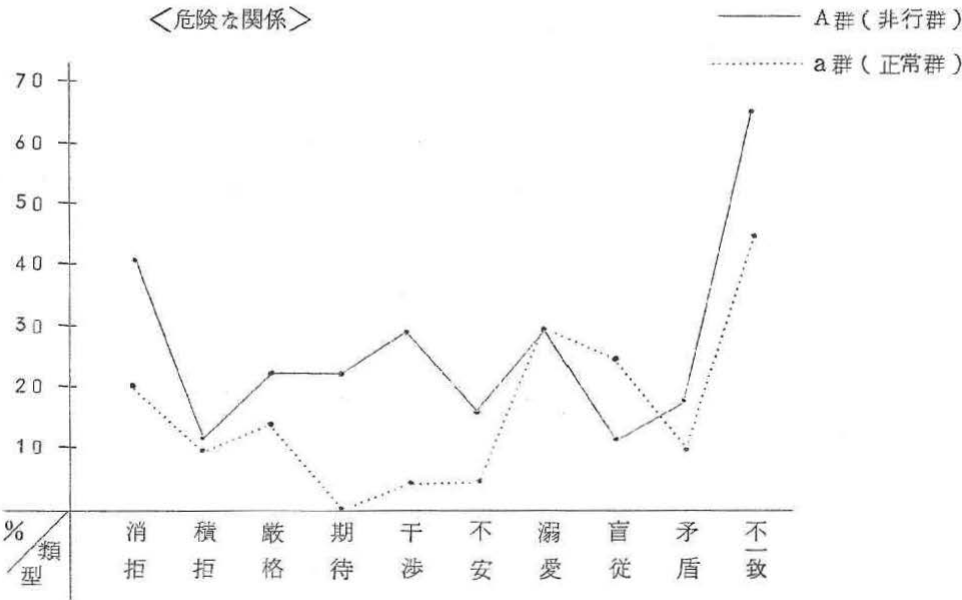
普通の母子関係について表Ⅳの7から、盲従型以外の類型はいずれも正常群に高いパーセントになっている。不一致・消極的拒否の類型は50%以下であるが、他の類型は事例の半数以上、とくに厳格・期待・干渉・不安などについては70%以上の好ましい母子関係を示している。

次にA・a・B・bの各群について比較・検討する。

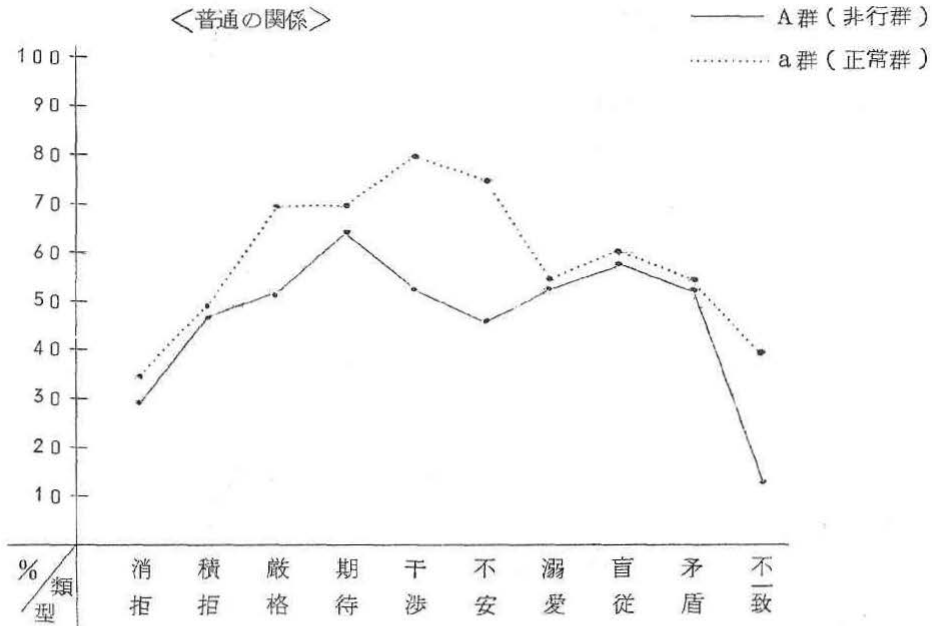
(1) 家庭状況がよくなく、知能程度の低い生徒の場合

まず、危険な母子関係について表Ⅳの9で示し、A群(非行群)・a群(正常群)について比較・検討する。

表Ⅳの9 子どもからみた母親の態度(A・a群)



表Ⅳの10 子どもからみた母親の態度（A・a群）



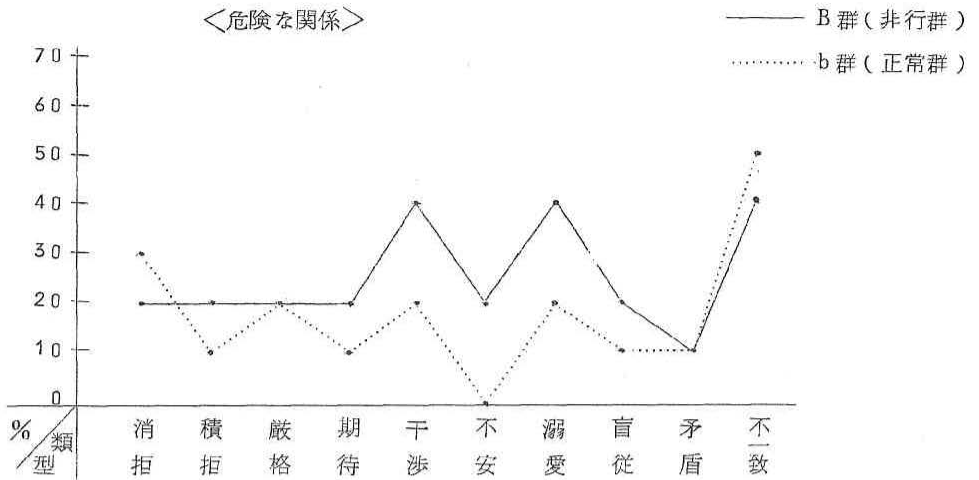
盲従型・溺愛型を除いては、いずれの類型も非行群の方に危険な母子関係が多いことがわかる。不一致（㊦ 65%：㊥ 45%）・消極的拒否（41%：15%）・期待（23%：0%）・干渉（29%：5%）でかなりの差をもって非行群に多い。父子関係で明らかになった顕著な特徴である厳格・積極的拒否・干渉とくらべて、父親は同じ拒否的態度であっても体罰・威嚇・過酷な要求などの態度であるのに対して、母親は無視・不信用・放任などの態度である。また、支配的態度でも父親は厳格・がんこ・命令・禁止で子どもを監督している態度に対し、母親は期待型であって、もっぱら母親の要求する方向や水準へ従わせようとする態度である。

普通の母子関係については、表Ⅳの10から正常群の母親は、くどくど干渉したり、必要以上の心配などはしない。この点非行群の母親とくらべて差異のあるところである。しかし、子どもに対する無関心の態度や放任、父親とのしつけの上で意見が合わないことは両群とも最も問題にすべき態度である。

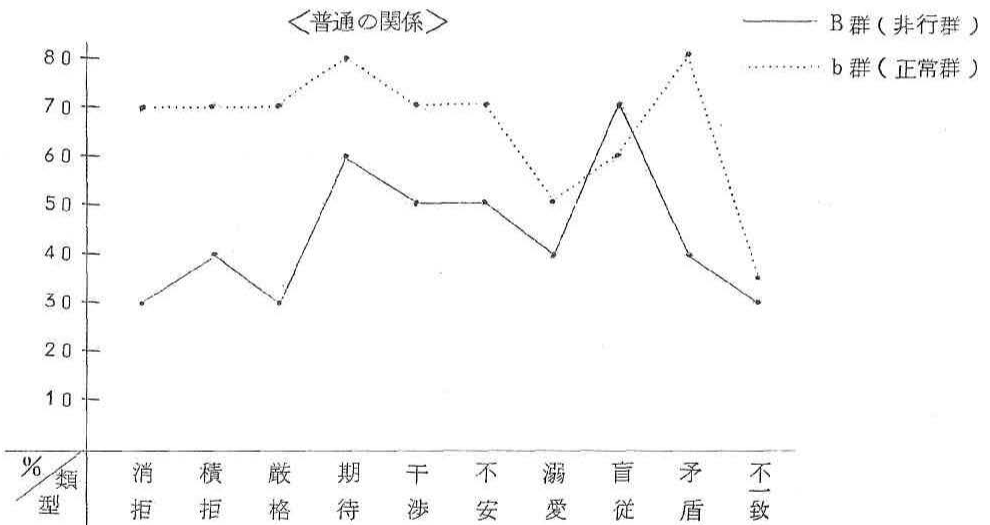
(2) 普通の家庭状況で、知能程度の高い生徒の場合

危険な母子関係について表Ⅳの11で示し、B群（非行群）・b群（正常群）について比較・検討する。

表Ⅳの11 子どもからみた母親の態度（B・b群）



表Ⅳの12 子どもからみた母親の態度（B・b群）



非行群の干渉（非40%：正20%）・不安（20%：0%）・溺愛（40%：20%）が問題である。普通の母子関係では両群とも事例数が多い。（表Ⅳの12） しかも、正常群は溺愛・盲従・不一致を除くほかは平均して高率である。

ここで危険な母子関係・普通の母子関係について、これまで比較・検討した結果を要約すると、

非行群 消極的拒否・期待・干渉・不安・溺愛の各類型で危険な母子関係にあるものが多い。

正常群 厳格・期待・干渉・不安の各類型で好ましい母子関係にあるものが多い。

すなわち両群は支配的態度（厳格・期待）・保護的態度（干渉・不安）に関して、明らかに区別できるのである。父子関係の場合は拒否的態度であった。支配的態度のつよい親は、子どもを親の所有物とみなし、力だけで子どもを監督したり、親の考え方や要求を子どもに押しつけようとする態度をとる。このような型の親から起こる子どもの問題は、意欲消失、希望消失、冷淡、無感動で、生活を自主的に運営する能力に欠けるといわれている。次に保護的態度の過ぎる親は、子どもをよりよくするために口や

かましく世話をしたり、できる限りの助力や指図を与えようとする。この型の親の子どもの問題は、心身の発達遅滞、依頼心が強く、忍耐力に欠け、自分をささえてくれる者がいないとたやすいことも処理できなく、普段は自信ありげだが、大てい内心に不安を抱いている。自己を統制する訓練ができていないので、考え方や行動は自己中心的である。自分のやり方で万事行なうことを欲し、興味のないことにはまったく反応しない。命令や制約をうけると反抗し、自分の思いのまゝにならぬときは、怒りを爆発させることによって周囲を圧服しようとする。かくて友人仲間では、争いが多くなり、集団生活に適応しにくいという型が生じることもある。

支配的態度・保護的態度で問題となる母親の事例を次にあげる。

事例

- ① 非行生徒と手をきらせるため、口うるさく干渉する。
 - ・ 非行グループのリーダー格として数回にわたって、窃盗を行なったAを、非行グループから手をきらせるため、母親は住所を移した。なお、不安・心配をいだいている母親はAの外出を気にし、風呂へいくにも付添った。Aは3年の秋から家出を数回重ねるようになった。(Aは中3男、窃盗・喫煙・飲酒・家出などの非行がある)
- ② 子どもの要求や情緒を過度に尊重する。
 - ・ Bは両親が年をとってから生まれた子どもである(父45才、母39才)。母親は子どもを愛するあまり、子どもの要求を殆んどいれてやっている。子どもが空巢に入ってカメラを盗み補導される。Bはカメラが欲しくて、だたをこねながら母にせがみ、買ってもらっている。Bの家庭は生活保護家庭である。(Bは中2男、窃盗・金銭乱費などの非行がある)
- ③ 子どものための弁解を常に用意している。
 - ・ Cは非行グループの一員で数回にわたって、窃盗を行なっている。母親はCは決して非行をやっていないと、他の者がCに責任を負わさせていると思っている。教師に対し、「学校で善悪の判断を少しも教えないから……」と不平をいう。(中2男、窃盗・放浪ぐせあり)
- ④ 親の一方的な期待、子どもの能力以上の期待。
 - ・ Dは小学校時代は成績がよかったが、中学1年生の1学期はよくなく、2学期になると反抗的となった。母親は担任から注意をうけると異状なほどDを責めた。期待に反したわが子の成績に落胆した母は、ただ叱責するだけであった。Dはやがて家出・放浪をかさねるようになった。(中2男、家出・放浪・窃盗)

次に家庭状況がよくなく、知能程度が低い生徒の場合では

- | | |
|---------|------------------------------------|
| A群(非行群) | 消極的拒否・期待・干渉・不一致で危険な関係を示す。 |
| a群(正常群) | 全般的に好ましい関係にあるが、とくに干渉・不安の類型は目立っている。 |

普通家庭状況で知能程度が高い生徒の場合

- | | |
|---------|--------------------|
| B群(非行群) | 干渉・不安・溺愛で危険な関係を示す。 |
| b群(正常群) | 全般的に好ましい関係である。 |

5. 親子関係の実態

これまで非行生徒と非行化しない生徒との親子関係をテストにより比較・検討することによって、非行生徒の親子関係の特徴を明らかにしてきた。ここでは明らかになった特徴がどのように個々の独自な条件のもとにある親子関係の中で展開しているか、また明らかになった特徴以外に指摘できるものがあるかについて、事例研究的に非行生徒の親子関係を検討する。

資料の蒐集に当たっては、教師、児童委員（民生委員）、親の記録や談話によるほか、調査者が直接家庭を訪問して面接したり、住居附近を踏査することによって集めた。

(1) 家庭状況がよくなく、知能程度が低い非行生徒の場合（事例数20）

ここでいう家庭状況がよくないとは、①貧困のため生活保護法の適用を受けているか、または、それに近い生活困窮家庭、②親の死・別居・離婚・家出・服役等により家族構成が破壊されている家庭、についていうのである。親子関係におけるいろいろな問題は当然このような要因および他の要因との間に複雑にからみあって、相互に作用しながら発生するものである。

① 親子の愛情

父子間、母子間での愛情の交流は普通で、父親よりは母親に愛情をもっている。数人の父親は生徒に対して敵対的・拒否的であった。子どもも父母に対し敵対的・無関心であった。

② 子どものしつけについて

放任しているか、時にはきびしく、時には甘やかしすぎて気分的なしつけ方が目立つ。子どもが勝手気ままのことをし、学校をずる休みしても別にとがめようとしなかったり、夜おそくまで出歩いても心配していない。3年生女子をもつ親は「子どもを信用しているから」といって11時過ぎまでも不良青年とぶらついていることについてなれきった態度であった。たいていの親は子どもが、どういう人ときき合い、どういう行動をしているかわかっていない。また、夜不良仲間が誘いにきた時子どもを守ってやれない親もある。

子どもの叱り方

- ・子どもに対し、「警察へつれていくぞ」「先生にいうぞ」「お前には何もしてやらないからね」などと小言でいったり、怒鳴り声を張り上げたりする。……………40%
- ・子どもに対しじゅんじゅんと説得する……………30%
- ・なぐる、けるの体罰を伴う……………20%
- ・食事を与えなかったり、テレビを見せなかったりするなど子どものもっている特権をうばって与えない。母親に多いやり方である。……………6%
- ・自尊心に訴える……………4%

なお叱る際に、多くの場合は両親の態度がちがっていた。父親よりは母親に負担がかかっていた。

③ 子どもに対する母親の監督

家庭が貧しいためか大部分の母親は外へ働きに出ている（70%）。大部分は日雇か飲食店の女給である。日雇の母親は早朝に家を出て働きに行き、飲食店につとめる母親は夕方家を出て深夜に帰宅している。したがって、母親のいない留守の間、子どもの監督をどうするかについて調べてみると、

- ・子どもを放任して勝手気ままにさせている。……………50%
- ・子どもがあやまちをやったときに注意するか、思いつきの注意にとどまる。40%

・たいていいつも注意している。

10%

子どもの日常生活全般について眼をくばり、適切にしつけていくことや、学校生活をきちんとやるように激励したり、子どもの交友関係、あそび、衛生などに注意したり、生命の安全について気を配ったりすることについては、大部分の母親はじゅうぶんとはいえない。これは、いわゆる「貧乏ひまなし」で働くことに追われて監督できないというだけでなく、子どもを保護養育する能力が拙劣であったり、子どもを理解できなかったり、親の手におえなくなった；などの理由にもよることであろう。

④ 子どもの進学・就職等将来に対する心づかい

親が子どもの進路について、はっきりした態度をもっていないと、子どもは生活に張り合いをもたなく、態度に落ちつきを欠くことがある。自分はどの方面に進むかということは、子どもにとっては一つの人生の岐路なのである。1学期末の調査では、

- | | |
|--------------------|-----|
| ・具体化している | 20% |
| ・漠然としている | 60% |
| ・親に相談しても、親は誠意を示さない | 20% |

であった。

(2) 普通の家庭状況で、知能程度が高い生徒の場合（事例数10）

普通の家庭状況というのは、前節で説明した家庭状況のよくない場合の事項に該当しないものをいう。また、知能程度が高いことは、必ずしもよい道徳性の発達を保証しないが、それは、わるい刺激をさけ価値ある刺激あるいは魅力的な目標を選ぶために、よりよい機会を与えるといわれている。普通の家庭状況で、知能程度が高い生徒で非行へ走るものが最近著しく増加している。本事例の生徒について、テストにより親子関係の特徴が明らかになったが、ここでは具体的な場における親子関係を検討する。

① 親子の愛情

父親の厳格・積極的拒否、母親の干渉・溺愛が問題である。事例によってうかがうことにする。

- ・子どもがテレビをみている。そこに父親が帰宅する。たちまちテレビをとめ「勉強やれ」と怒鳴る。時にはなぐる、けるの体罰を加え、子どもの話を聞こうとしない。（父は大学卒、子どもは中学2年、家出・窃盗を行なう）
- ・「子どもにきびしくなくては…」といって、しばしばなぐる。子どもはなるべく父親から離れようとしており、母親は逆に必要以上に子どもを甘やかしている。（父は旧中卒、子どもは中学3年、暴力行為・家出を行なう）
- ・父親は自分の考えを強要することがしばしばである。子どもは父親との接触をさけ、食事の時でも父親がいなくなってから食卓についたり、或は自分の部屋でひとりでこっそり食べている。（父は大学卒、子どもは中学3年、窃盗・家出を行なう）
- ・成績もよく、性質もよい妹が交通事故で急死した。両親のなげき方は大きく、以来たびたび「あんな良い子が死んで、お前のようなものが残った…」と。その後子どもは非行グループに入って数多くの非行を行なう。（父は旧中卒、子どもは中学3年、窃盗）

② 子どものしつけについて

父親よりも母親に問題がある。甘やかし・干渉・無視・放任などである。父親は体罰をしばしば加えたこと、力で抑えようとしたことによって、父子関係を悪くしている。

子どもの叱り方は説得や自尊心に訴えることが多い。親はかなり教育もあり、子どもの能力もすぐれているのであるから、おどしや体罰ではかえって反抗心をつよめることを知っている。

③ 子どもに対する母親の監督

共稼ぎ家庭が多く、70%の母親は外へ働きに出ている。子どもに対する母親の監督をみると、

外へ働きに出ていく母親の監督

・放任	30%
・干渉しすぎる	20%
・気分的	10%
・しっかりしている	10%

主婦として家にいる母親の監督

・きびしい	10%
・気分的	10%
・しっかりしている	10%

両親とも仕事に追われて、あまり家庭を顧ることがなく、子どもに対する過信もあって放任が多かった。また、小さい頃から留守居をさせ、いくらのおやつ代を与えて自由につかわせたこと、友だち関係に対する無関心、あそびや家庭学習に対する配慮がたりなかったなど非行へ走らせた要因と考えられる。

④ 子どもの進路に対する心づかい。

高校へ進学させることにきめている。

4. まとめと考察

これまで子どもの人格形成に及ぼす親の影響について、親子関係診断テストや教師・児童委員（民生委員）などの日常生活の観察などにもとづき検討してきた。その結果、全体的にいわれることは、非行群は正常群よりも危険な関係にあることである。とくに非行群の父親の態度で、積極的拒否・厳格・干渉・不安が、母親の態度で消極的拒否・期待・溺愛・干渉・不安が、子どもにいろいろな問題を起こす原因となり、親子関係を一層危険なものとしている。

非行生徒の父親の態度で重要な問題は積極的拒否・厳格についてである。いずれも愛情に関する問題で、愛情はあっても表現に欠陥があったり、或は愛情の欠如によって生ずるのである。実際個々の事例に当たってみると、どの親も子どもを愛していることについては普通と変わりはないか、むしろ愛しすぎている（干渉・不安の保護的態度で危険である）のではないかとみられるのである。しかし愛情もやはり相互の人間関係から生ずるのであるから、場によって愛情が高まったり、低くなったりするし、時には愛情の欠如という場面も生ずる。親自身意識していない中で、ゆがめられた愛情が子どもの人格形成に影響を与えているのである。親が自分の感情にまかせて子どもにはげしい体罰を加えたり寛容のないきびしさで接したり、ガミガミ怒鳴ったり、スパルタ式に過酷にしつけることが教育と思っている。このような親の態度のもとで子どもに起きる問題は、い縮するか、はけ口を家庭外に求めて家出・放浪し、結局は不良仲間にはきこまれていたのである。正常群の父親は子どもを過酷に取扱いということはなく、また、問題になるようなことはなかったのである。非行生徒の父親になぜこのような態度がつよいのであろうか。家庭状況がめくまれていないことから起こる親子関係のゆがみ、あるいは長い間の積み重ねられた性格の偏りからとも考えられ、また、親自身の不満やコンプレックスの反映であるとも考えられる。自分自身のコンプレックスが子どもを過酷に取扱うことによって解消されているのであろう。

母親の態度では消極的拒否・期待・溺愛が重要な問題である。

消極的拒否は子どもに対して無視・放任・無関心・不信用・悪感情・不一致感などを示す親の態度である。こういう母親はめったにあるものではないが、結果においてそうになっている例が少なくないので

ある。例えば

- ・生活を犠牲にしてまで子どものめんどろをみておれない。
- ・子どもの行動や友人関係などわかっていない。生命の危険から身を守ることにに対して注意しない。
- ・学業成績について関心を示さなかったり、家庭学習についての配慮がたりない。
- ・子どものいうことについて拒否し、批判し、信用しない。子どもの要求に対し理解がない。
- ・子どもをバカにしたり、茶化したり、皮肉ったりして子どもの立場を尊重しない。
- ・子どもがよいことをしてもほめないし、悪いことをしても叱らない。
- ・家庭の日課は秩序が乱れ、現在よりも向上しようとする意気込みが少なく、行動の基準は劣悪。
- ・子どもの進路について関心や誠意を示そうとしない。
- ・子どもに対する態度はむら気で無責任である。

このような母親の態度は、親自身の性格上の問題のほか、生活に追われて子どもに関心が向かないこと、親自身が生活を投げ出したような態度、子どもを含めて何事にも積極的な、建設的な関心を示さないこと、親の自信のない無定見さから子どもに無関心になっていること、複雑な人間関係から生じた無関心によること、などから生ずるのであろう。

期待の態度で問題なのは子どもに過度の要求や生活目標を課することである。子どもの成熟度や能力をよく理解してやらないで、親自身の子どもの頃と比較し、また、きょうだいや友だちと比較し、その結果、過重な負担を課しており、口やかましく小言をいったり、おどしたり、叱ったりする。このような態度の、子どもにおける問題は劣等感や不適応感を起こしている事例が多かったのである。正常群の生徒の母親は子どもに過度の期待はしなかった。非行群の母親にこのような態度がつよいというのは、母親自身の子どもの頃の良い経験が影響したり、現在のめぐまれない生活からのがれたいため子どもに期待をかけていることから生ずるものと考えられる。

次に溺愛の態度が問題である。子どもを甘やかし、愛情にみちているが理知に欠けている。子どもの成長程度をじゅうぶんに理解していないのである。このような親のもとで、子どもに起きる問題として自己中心的、自己統制困難、協調性欠如、自主性がなく、創造性がなく、忍耐力や責任感がないことなどをあげることができる。

両親とも共通している態度として過度の保護的態度（干渉・不安）がある。干渉は子どもをよくするために、出来るだけの助力をおしまない態度であり、不安は子どもについて無意味と思われる心配や不安を抱き、そのため必要以上の責任をとり、過度の援助や保護を与える態度である。子どもは自主性・計画性・自発的行動性が発動する余地がなく、他人に対して、はにかみやすく、母親に依存する態度が強いが他人に対しては自己顕示的であり、攻撃的になりやすい。正常群では保護的態度でとくに問題になるようなことはなかった。

V 性格特性と親子関係との関連

これまで述べてきたことは、非行生徒の性格特性や親子関係における問題点を明らかにしたものである。ここでは非行生徒の性格特性の中で、とくに問題となったA B（攻撃的）・R（のんき）・O（回帰性傾向）・N（神経質）などの特性と、親子関係との関連について検討する。

1. A_g（攻撃的）と親子関係

非行生徒の性格特性の中で、攻撃的であることは目立った特徴であった（P 10 参照）。積極面（標準点4および5）の攻撃的な特性をもつ非行生徒の親子関係で、とくに危険な関係をもつものについて類型ごと事例の集まりを示すと、表V-1のとおりである。

表V-1 A_g（攻撃的）と危険な親子関係

群	類型親	消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	溺 愛	盲 従	矛 盾	不一致
非 行	父	21	17	22	8	13	4	17	8	9	22
	母	20	9	17	12	17	4	21	13	9	38
	計	41	26	39	20	30	8	38	21	18	60
正 常	父	8	8	0	0	0	0	4	8	8	0
	母	0	0	4	0	0	0	8	8	0	8
	計	8	8	4	0	0	0	12	16	8	8

（標準点）

表V-1' A_g（攻撃的）と危険な親子関係（A・a・B・b群）

類型 親 群		消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	溺 愛	盲 従	矛 盾	不一致
父	A	16	8	17	8	8	4	8	8	4	8
	a	8	4	4	4	4	0	4	8	8	4
	B	5	9	5	0	5	0	9	0	5	4
	b	0	4	4	0	0	0	0	0	0	4
母	A	16	4	12	12	8	4	12	0	4	24
	a	0	0	4	0	0	0	8	8	0	0
	B	4	5	5	0	9	0	9	13	5	14
	b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4

（標準点）

表V-1により非行群と正常群との標準点を比較・検討する。いずれの類型においても非行群の標準点が高いが、とくに不一致・厳格・消極的拒否・干渉などの類型で顕著な差が認められる。また、期待・干渉・不安などの類型は正常群に全くない。以上からして、攻撃的な性格をもつ生徒が非行群に多いことがいわれる。

次に非行群は、どのような父子関係、母子関係にある事例の集まりであるかを検討する。表V-1を見ると、父子関係では不一致・厳格・消極的拒否などの類型で、また、母子関係では不一致・溺愛・消極的拒否などの類型で、いずれも高い標準点を示している。すなわち、そのような類型に攻撃的な性格をもつ生徒が多くいるのである。父子関係と母子関係の標準点の差から各々の特徴がうかがわれるのであるが、父親の態度が積極的拒否・厳格であり、母親の態度が期待・干渉・溺愛・盲従・不一致である場合に攻撃的な性格をもつ非行生徒が目立つ。

両親の養育態度が一致せず、とくに父親が拒否的であり、母親が過保護の場合は、子どもは激しい反

抗心を抱き攻撃的になることは事例で明らかである。

2. R（のんき）と親子関係

非行生徒の性格特性でR（のんき）も目立った特徴の一つである。Rは、のんきな・気軽な・活発・衝動的な性質をもつ性格の特徴である。積極面のRをもつ非行生徒の親子関係で、とくに危険な関係をもつものについて、類型ごとに事例の集まりを示すと、表V-2のとおりである。

表V-2により非行群と正常群との標準点を比較・検討する。一見して非行群に危険な関係が顕著であることがわかる。次に非行群だけについてみると、不一致・干渉・溺愛・消極的拒否・厳格などの類型において標準点がとくに高い。これはR（のんきな、衝動的な性質）をもつ非行生徒は、両親の不一致・干渉・溺愛・消極的拒否・厳格などの養育態度の結果とも考えられよう。更に、父親・母親の各の態度について検討すると、全般的には母親の態度に問題が多いが、とくに干渉・不安・不一致・溺愛の態度の場合が問題となる。父親の態度については、それほど目立つものはない。

表V-2 R（のんき）と危険な親子関係

類型 群 親	消 拒 積 拒 嚴 格 期 待 干 渉 不 安 溺 愛 盲 從 矛 盾 不一致										
	父	2 5	8	2 4	1 2	2 1	4	2 5	8	1 3	2 6
非 行	母	2 0	8	2 1	2 0	3 7	1 6	2 9	1 7	4	3 8
	計	4 5	1 6	4 5	3 2	5 8	2 0	5 4	2 5	2 7	6 4
正 常	父	4	5	0	0	0	0	0	0	0	5
	母	0	0	0	0	0	0	5	5	0	0
	計	4	5	0	0	0	0	5	5	0	0

（標準点）

表V-2' R（のんき）と危険な親子関係（A・a・B・b群）

類型 親群		消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	溺 愛	盲 従	矛 盾	不一致
父	A	16	8	12	8	16	4	16	8	8	12
	a	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	B	9	13	14	4	5	0	9	0	5	14
	b	0	5	0	0	0	0	0	0	0	5
母	A	12	8	8	12	24	8	12	4	4	24
	a	0	0	0	0	0	0	5	5	0	0
	B	8	0	13	8	13	8	17	13	0	14
	b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（標準点）

3. C（回帰性傾向）と親子関係

Cの特徴は，回帰性傾向である。すなわち著しい気分の変化，驚き易い性質である。このような性格の特徴を示す非行生徒の親子関係で，とくに危険な関係をもつものについて，類型ごとに事例の集まりを示すと，表V-3のとおりである。

表V-3 C（回帰性傾向）と危険な親子関係

類型 群	親	消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	溺 愛	盲 従	矛 盾	不一致
非 行	父	17	21	21	4	17	4	17	8	8	22
	母	17	17	17	9	13	0	13	9	9	26
	計	34	38	38	13	30	4	30	17	17	48
正 常	父	9	9	5	5	5	0	5	10	10	10
	母	4	0	5	0	0	0	5	5	4	30
	計	13	9	10	5	5	0	10	15	14	40

（標準点）

表V-3' C（回帰性傾向）と危険な親子関係（A・a・B・b群）

類型 親	群	消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	溺 愛	盲 従	矛 盾	不一致
父	A	13	13	17	4	13	4	13	8	4	9
	a	9	5	5	5	5	0	5	10	10	10
	B	4	8	4	0	4	0	4	0	4	13
	b	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0
母	A	13	12	13	9	9	0	9	0	4	17
	a	4	0	5	0	0	0	0	0	4	26
	B	4	5	4	0	4	0	4	9	5	9
	b	0	0	0	0	0	0	5	5	0	4

（標準点）

表V-3により非行群と正常群との標準点を比較・検討する。いずれの類型においても非行群の標準点が高いが，とくに拒否（消拒・積拒）・厳格・溺愛などの類型に顕著な差が認められる。不一致の態度については両群とも高い標準点を示しているが差が小さい。以上から，回帰性傾向の生徒が非行群に多いことがわかる。また，親が子どもを無視し放任し，過酷に取扱いなど，適切な愛情を示さなかったり，あまり厳格であったり，溺愛したり，両親の養育態度が異なっていると，子どもの問題として回帰性傾向が目立つようになる。

次に父親・母親の各々の態度について検討すると，まず，全般的には父親の態度に問題が多い。このことは，A G（攻撃的）・R（のんき）が母親の態度に問題が多かったのに対し，注意すべき点である。回帰性傾向をもつ非行生徒の母親は，子どもの能力以上のことを期待しすぎたり，父親としつけ上の意見が一致していない。

4. N（神経質）と親子関係

非行生徒の性格特性でN（神経質）もやはり目立った特徴の一つである。神経質とは、心配性・神経質・ノイローゼ気味などのことをいう。神経質の特徴を示す非行生徒の親子関係で、とくに危険な関係をもつものについて、類型ごとに事例の集まりを示すと、表V-4のとおりである。

表V-4 N（神経質）と危険な親子関係

類型 群	親	消 拒 積 拒 厳 格 期 待 干 渉 不 安 溺 愛 盲 従 矛 盾 不一致									
		消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	溺 愛	盲 従	矛 盾	不一致
非 行	父	17	21	22	9	17	9	17	13	13	26
	母	25	18	22	17	17	4	16	13	14	38
	計	42	39	44	26	34	13	33	26	27	64
正 常	父	9	5	0	0	0	0	5	9	9	0
	母	4	0	5	0	0	0	4	4	4	13
	計	13	5	5	0	0	0	9	13	13	13

（標準点）

表V-4' N（神経質）と危険な親子関係（A・a・B・b群）

類型 群	親	消 拒 積 拒 厳 格 期 待 干 渉 不 安 溺 愛 盲 従 矛 盾 不一致									
		消 拒	積 拒	厳 格	期 待	干 渉	不 安	溺 愛	盲 従	矛 盾	不一致
父	A	13	13	18	9	13	9	13	13	9	13
	a	9	5	5	5	5	0	5	9	9	9
	B	4	8	4	0	4	0	4	0	4	3
	b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
母	A	17	9	13	13	9	0	8	9	9	21
	a	4	0	5	0	0	0	4	4	4	13
	B	8	9	9	4	8	4	8	4	5	17
	b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（標準点）

まず、非行群と正常群との標準点を比較・検討する。表を見て直ちにわかるように非行群の標準点が高い。これは神経質の性格をもつ生徒が非行群に多いことを示すものである。とくに不一致・厳格・拒否・干渉・溺愛の態度で育てられた子どもに神経質のものが多くのである。次に、父親のいかなる態度母親のいかなる態度が問題であるかについてみると、父親に関しては、子どもに対する態度が母親と一致しないことや子どもについて無意味と思われるような心配や不安を抱いたり、逆にきびしく子どもを取扱ったりするような態度であり、また、母親の態度に関しては、子どもに対し無関心・放任・不信用或は能力以上のことを要求する態度である。

5. まとめと考察

これまで非行生徒の性格特性のうちでも目立った特徴であるAg（攻撃的）・R（のんき）・C（回帰性傾向）・N（神経質）などの性格をもつ非行生徒は、いかなる親子関係にあるかを検討してきた結

果、両親が子どもに対する態度で一致しなかったり、子どもを過酷に取扱ったり、保護しすぎる家庭においては、攻撃的な性格をもつ子どもが多くみられたのである。また、衝動的な性格をもつ子どもの場合においても殆んど同様であった。父親の態度だけについてみると拒否的・支配的な場合に攻撃的な子どもが目立ち、母親の態度では保護的・子どもに服従的な場合である。

両親間の養育態度が一致しなかったり、拒否的であったり、自分本位で権威的・支配的な態度、あるいは子どもに服従的な態度であると、子どもの落ち着きや、のびのびした精神の発達がゆがめられて、気分が変わりやすく、思いつきのまゝ行動する子どもとなったり、逆にいつもくよくよする神経質の子どもとなったりする。

両親の不一致的・拒否的・支配的な態度は以上の四つの特性にいずれも関連のあるものであるが、おそらく非行生徒の示す他の性格の特徴にも関連のあることと思う。すなわち、このような態度を共通の底辺として、その上にいろいろな好ましくない養育態度がプラスされることによって、子どもの性格も種々特徴がかわってくるのではなからうか。父親が拒否的・支配的な態度で母親が保護的な態度で問題となる場合は、子どもは多く激しい反抗心を抱き反社会的な傾向をたどるようになる。子どもによっては、攻撃性をかくそうとして表面、おとなしい、ひっこみ思案の態度をとるものもあるが、何かの機会に衝動的に残酷な態度にかわる。非行生徒の中にはこの種の両親をもつものが多いといわれている。父親は拒否的・支配的な態度で母親は服従的な態度で問題になる場合は、事例では落ち着きがなく、人の顔色を見て動くようになり、気分が変りやすく、また物事にくよくよする。情緒的には幼児的な特徴を示し、自己統制がうまくいかなく、それだけに力のある者から誘われたり、そそのかされたりすると容易に非行へ走っているようである。

正常群については事例数が極めて少なく考察の対象とすることに問題があるのでふれないことにした。

第3部 非行化傾向のなくなった生徒の指導事例

I 全体計画

非行化する原因についてはいろいろ考えられるが、大別して素質的な要因と環境的要因とに分けられる。この二つの要因は、いずれもが影響しており、それぞれいくつかの要因に分けられ、複雑に組み合わされて相互に作用している。

非行化した子どもで現在その傾向が認められないものについても、同様に諸種の要因がからみ合い、作用して、非行化傾向がなくなったと考えられるのである。

非行化傾向がなくなったといっても、ただ一回きりで二度と再発しない場合もあるし、長期間再発しないでまた発生する場合もある。手に負えないような悪質の非行生徒が急に転向し、まじめな生徒になれそうだがいま一步のところでなかなか転向できないものもある。非行が比較的短期間に繰り返され、しだいに非行の質が悪化していく場合、繰り返しながら回復していく場合、だらだらと同じ傾向が続く場合とがある。

非行生徒の更生はいろいろな要因によるものと解されるが、とくに更生のための指導がどのようになされたかについて大きく影響するものである。しかし、ここで注意しておきたいのは、すでに深入りした非行生徒たちを指導する場合、非行が行なわれるにいたった原因、すなわち非行以前の過去にさかのぼって原因を究明することが、そのまゝ該当し役立つ場合もあるけれども、大切なことは二度と再び非行を行なわないように、いかに指導するかという、非行以後の将来へ向かっての指導である。具体的に言えば個人に残された可能性をいかに伸ばしていくかということである。したがって非行生徒個々のもつ可能性に応じて、目標を定め、適切な方法手段をつくすことになる。

1. 対象の生徒

- (1) 小学校で非行化していたが、中学校でなくなった生徒
- (2) 非行グループを離れ、非行化傾向のなくなった生徒

2. 研究の方法

対象生徒の抽出	学級担任教師による
研究の方法	事例研究法

3. 目的

非行化傾向のなくなった生徒について、非行以前と非行以後で何がどのように変わったかを比較・検討し、非行以後の指導を明らかにする。

II 指導事例

A 小学校で非行化していたが、中学校でなくなった生徒

1. 明かるい親子関係で子どもを立ち直らせた事例

(1) 問題生徒 A男 15才・中学3年生 知能偏差値 50

小学校5年生の頃から同じ寮内に居住する不良の子ともと親しくなり、しばしば金品を持ち出しては浪費し、夜おそくまでうろつき、注意されていた。6年生の時、数回にわたって友だちと住居附近の店で飲食物・日用雑貨等を万引し、警察に補導された。中学校では問題となるような行動もなく、明かるい態度で生活している。

(2) 小学校から中学校へ

① 身体について

生育歴 乳児期から現在まで特別異状を認めない。普通。

体格および身体状況 体格は普通。身体状況では異状を認めない。

② 性格および行動について

教師・親・児童委員（民生委員）などの意見を総合すると

小 学 校

中 学 校

- ・身体不潔，悪臭を放つ。（1年生）
- ・小心，迫力なし，根気づよさなし，叱られるとすぐ涙ぐむ。（3年生）
- ・明朗性を欠く，仕事にも熱心さが無い。（5年生）
- ・態度に落ち着きがない。口数も多くなり，授業中私語が目立つ。（6年生）

- ・温 順
- ・真 面 目
- ・内 気

※行動および性格の記録 評定 C

※ 評定 B

○次に矢田部・ギルフォード性格検査（Y-Gテスト）により性格の特徴を明らかにする。表1は性格の特徴を示すプロフィールである。

類型，性格型 A'型（準平均型）

概して調和のとれた，外向性の子どもである。人とあまり協調を好まず（Co），やゝ衝動的（R）である。

○性格・行動についての自己評価。（田研式親子関係診断テスト第二部による）。反応した項目の中で

- ・落ち着きなく体を動かしているといわれる。（落ち着きなし）
- ・私は，とても気が散りやすい。（注意散漫）
- ・私は，友だちといつもうまくいかないが，どうしたらよいかわからない。（対人的不適応）

などについては，Y-Gテスト結果による性格特性や教師や親などの観察結果をうらづけるものとみなしてもよい。

表1 矢田部・ギルフォード性格検査
プロフィール

D	1	2	③	4	5	D
C	1	2	③	4	5	C
I	1	2	③	4	5	I
N	1	②	3	4	5	N
O	1	②	3	4	5	O
Co	1	2	3	④	5	Co
Ag	1	2	③	4	5	Ag
G	1	2	③	4	5	G
R	1	2	3	④	5	R
T	5	4	3	②	1	T
A	5	4	3	②	1	A
S	5	4	3	②	1	S

③ 家庭状況について

a. 家族構成

A男は末子である。

住居は元引揚者収容所をそのまま利用し、現在約100世帯が入居している。約8畳1間だけである。光線・換気など不良。

b. 家族関係

幼児期から小学校、中学校へと家庭環境がどのように変わってきたかを把握するため

その要点のみを表3に示した。教師・親・児童委員（民生委員）からの報告をまとめたものである。

表2 家族構成

続柄	年令	健否	学歴	摘要
父	58	健	小卒	土建業
母	53	〃	〃	A男の非行以後家庭に入る
姉	21	〃	中卒	店員
本人	15	〃		中学3年生

※兄たちはそれぞれ独立し世帯をもっている。

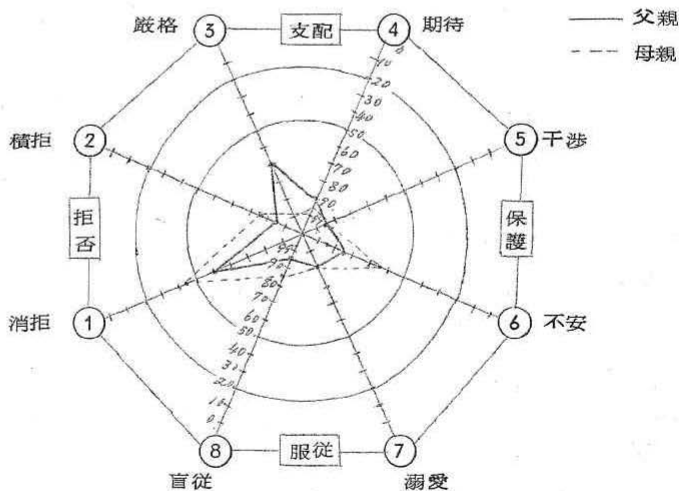
表3

幼 児 期	小 学 校	中 学 校
<ul style="list-style-type: none"> Aの生前、外地から引揚げて現住所に居住。 家族にいろいろな問題があった近所の風評はよくなかった 生活程度は下 	<ul style="list-style-type: none"> 共稼ぎで子どもの監督はじゅうぶんでなかったと思う。（親の意見） 兄…ぐれる。盗みをやる。 本人…不良交友。盗みをやる 生活程度は下 	<ul style="list-style-type: none"> 母は外へ働きに出ることをやめて、家庭で子どものしつけを行なうことに専念する。 兄たちはしっかりした社会人となり、独立して世帯をもつ。 生活程度は中となり経済的ゆとりもでてきた。

両親の養育態度を田研式親子関係診断テストについて検討した結果を表4に示した。

表で見るとおり両親とも好ましい状態である。母親はやゝ消極的拒否型である。しつけの上で父親と意見が一致していない。父親は過去にいろいろな反道徳的行為のあった人で、子どもに「おれは若い頃から悪いことを沢山行なってきた。悪いことをしたことのないような人間は、本当に良い人になれない」といっている。こういう父親の人生観が子どもに何らかの点で影響していると考えられる。

表4 親子関係診断テスト



以上家庭状況について検討してきたが、問題をまとめてみると、

- イ Aの幼い頃家族に反道徳的行為があったこと。外地から引揚げてきて、生活を営む上に困難があったことは推察されるが、反道徳的行為のあったことは親としての適格性に問題がある。

型	父	母
矛盾型	4.5	3.5
不一致型	4.5	1.0

ロ Aは末子で甘やかされた反面、母親が毎日外へ働きに行くことによっておこる、しつけのふじゅうぶんさ。

ハ 共稼ぎで母は日雇として働き、ほとんど日中は不在であった。生活は本生徒の幼少の頃が最低であったが、中学生時代は生活程度は中位である。

ニ 非行以後は子どものしつけや監督により心をくはるようにしている。

④ 学校環境、地域環境について

指導要録の記載事項、教師や親の学習状況について観察した報告をまとめてみると

小 学 校	中 学 校	本 人 の 意 向
イ学業成績の総評 2 ロ学習態度 ・意欲なく常にきょうきょうしている。(1年) ・注意散漫で私語が多い(3年) ・真剣味が欠く(5年) ・基礎力がない(6年) ハ寮内の不良児とつき合う	イ学業成績の総評 4 ロ自主的学習態度で、向上の一端をたどっている。 ハ小学校時代友だちだった不良の子どもから離れ、クラスの生徒と交わっている。 ニ下校しても遊ばず、珠算塾へいっている。	・いままでは遊ぶことがおもしろかった。 ・今はよい職に就くには良い成績をとらねばならないと思って勉強している。

(3) 指導と考察

この事例は小学校で非行があったが、中学校で非行がなくなった例である。小学校から中学校への変化をたどりながら、何が問題であり、何が、いつ、どうなったかについて検討してきた。非行へ走った要因として考えられるのは

- ・貧しい生活、共稼ぎによる母親の子どもに対する監督ふじゅうぶん。
- ・風評の立つほど、道徳的に問題があったこと。
- ・不良交友

非行以後の指導について

① 父親のしつけの態度

「子どもを育てることは植木を育てるようなものだ。植木をうまく育てるような人でなければ子どもをじょうずに育てられないことを知った。」と近所の親たちに口ぐせのように言っている。

子どもとは仲がよく、叱るけれども常に笑い声が絶えない。目標をもった自信のあるしつけ方である。

② 母親のユーモラスでゆとりのある態度

・子どもの不良化を防ぐためには金に代えられないとして共稼ぎをやめ、家庭にあってもっぱら子どもの相談相手となった。経済的にもゆとりができたことも考えられよう。

・ユーモラスで明るく、親子間の緊張感をときほぐし、子どもに安定感を与えている。家庭を明るくし、子どもとは父親同様仲がよい。母親がユーモラスであることは非常に大切なことで、これはあとで考察のところでふれることにする。

・同じ寮内の子どもたちとは遊ばせないように注意してきた。クラスの友だちと交際させるように仕向けてきたのである。子どもが帰宅すると、外で遊ばせないようにして、珠算塾へやっている。

・「この子は内気な子だが、この点がなれば申し分がない子だ」と、子どものしつけについてかな

り、ゆとりをもって接している。これは兄たちも小さい時、非行があったが年をとってから更生し、今ではしっかりした社会人となっていることから、子どもの導き方にある程度の自信をもっているのではなかろうか。

- ・母親に対する近所の評判は、良い人、よく働く人、礼儀正しい人でおっている。そういう母親の生活態度が子どもに何らかの影響を与えていると考えられるのである。

③ 家族の将来についての希望や抱負心が強く、子どもを常に励ましている。自尊自助の態度が強い。

- ・親も子も個性がはっきりしており、一見おのおのがわが道をゆくようだが家族はよく協力し合っている。家族の団らんや話し合いはしばしばやっている。子どもに将来の夢をもたせ、大切に子どもを育てている。兄たちもかつて非行へ走ったが、いずれも更生しているのは、子ども自身が自重自愛して自分の力で立ち直ったのではなかろうか。Aもきっと自分で立ち直ることができると思う。(児童委員の報告)

④ 教師の指導

- ・交友関係について家庭と連絡し、不良生徒のむれに近よらないこと、余暇利用を工夫するよう(珠算塾へ通い、趣味としての木工)指導。

- ・家庭学習をじゅうぶんやらせるため、学級内の学習係を命じ、毎日宿題の点検をやらせた。こうすることによって家庭学習への動機づけをつくったのである。

(4) まとめと考察

親子関係が明るく、しつけの態度にもゆとりをもっている。とくに母親の態度が子どもに大きな影響を与えているのである。非行少年の親はユーモラスに乏しいといわれている。これは第二部の研究においても非行生徒の親は、どなたたり、小言をいうときくらいしか子どもと接触がない。子どもに理解のあるユーモラスな親ほど子どもに好かれていられると考えられるが、非行少年の親は一般にユーモラスでない。精神的貧困なのである。Aの母親はユーモラスで、どれほど親子関係を円滑にしているか、子どもに安定感を与えているか想像できるのである。母親の礼儀正しい態度、よく働く態度など、あるいは母親の価値観(父親とのしつけ上の差異も価値観にもとづくのではなかろうか)が、子どもに模倣され、とり入れられていることも考えられる。

2. 家族の協力で非行化した子どもを立ち直らせた事例

(1) 問題生徒 B男 14才 中学2年生 知能偏差値 42

Bはどもりで気が短かく、他人に対してしばしば乱暴し、他人からきらわれていた。小学校5年生の頃から怠け休みが目立つようになり、はとのことから不良の友だちに近づき、やがて不良グループの成員となって、下級生や弱い者にいんねんをつけては金品をたかっていた。6年生の時、中学生の手先に使われて古銭を盗み、それを売った金で主として飲食に消費した。また、グループの3人と共に家出し万引や窓盗を行ない、盗んだ金品で飢をしのぎ、夜は小学校の体育館で泊り、昼は放浪し家人や教師に心配をかけたこともある。わがままで自分の思いどおりにいかないと、すぐ怒って乱暴したり、教師の注意に対しても時々逆上し、わめいたり、ののしったり、器物を手当たりしだい損傷した。

中学1年生では時にクラスの生徒に対して乱暴を行なったこともあるし、怠け休みも1～2回あったが現在では問題になるような行動はほとんどない。

(2) 問題点の分析

上記のように現在非行が認められないことについて、いかなる要因が作用しているか明らかにするた

めに、小学校で非行を行なった際の要因として何が考えられるか、中学校でそれらの要因の中、何が改善されたか、どのような要因が加わって非行がなくなったかについて検討する。

① 身体について

乳児期から現在にいたるまで順調な発育で、病気らしい病気はしていない。体格は均斉がとれており普通である。幼児以来どもりであり、気にしている。また、小便が近く、人前にでると顔が赤くなり、けっべきぐせがある。

② 性格および行動について

○指導要録によると

小学校時代——感情が激しく、けんかの早い子（4年）、逆上して乱暴、情緒不安定（5年）、少しのことで興奮しやすい、自制心なし（6年）。

中学校時代——行動および性格の評定項目である責任感、根気づよさ、自省心、向上心、公平さ、同情心、公共心、情緒の安定等についてはCの評定で、他の項目はBの評定である。趣味は動物の飼育で、虫や小動物をもてあそぶことも大好きで、ポケットの中にトカゲ、カエルなどを入れておくこともある。性格・行動全般に対する教師の所見では、明朗な一面をもっているが、自己主張だけで他人の話に耳を傾けない。

○教師、親、児童委員の観察によると

小学校時代——わがまま、衝動的、劣等感大、乱暴な言動、少しのことでカッとなる、教師に反抗的、感情が非常にはげしく自分を抑えることができない、怒りやすく、他の児童は本人をこわがって仲間にならなかった。「性格が変わった子どもとして印象に残る」と小学校の教師からの報告である。成績が少しでもまがると非常に気落ちするので、評価に気をつかったということである。

中学校時代——明朗で誰に対しても陽気に話しかける。気が短いところもある。上っ調子、落ち着いた教室内の行儀もよくない。言動が乱暴でときどきけんかをする。友だちは多いが気分的で、その場かぎりの交わりである。

これらの性格・行動の特徴は、一言にしていえば性格形成が未熟で、多分に幼児的な特徴をもっており、情緒的未成熟という発達からくる障害の一面（親子関係に早期から問題があった）をうかがうことができる。

○矢田部・ギルフォード性格検査（Y-Gテスト）

の結果について

類型・性格型 A' 型（準平均型）

特徴（I）劣等感が大きく、（N）神経質で情緒は不安定の傾向である。

（Co）他人との協調を好まない、

情緒的不適応が非行へ走らせたと考えられよう。

○性格行動についての自己評価（田研式親子関係診断テスト第二部による）

反社会性では………○ときどき人にものを投げつけたりこわしたりする。

○はで好きで、おしゃれ。

○出しゃばり、おせっかい、奇声、おべっか。

非社会性では………○一人ぼっちでいることが多い。

○友だちといつもうまくいかない、どうやってあそべばよいかわからない。

矢田部・ギルフォード性格検査プロフィール

D	1	2	③	4	5	D
C	1	2	⑤	4	5	C
I	1	2	3	4	⑤	I
N	1	2	3	④	5	N
O	1	2	⑤	4	5	O
Co	1	2	3	④	5	Co
Ag	1	②	3	4	5	Ag
G	1	2	③	4	5	G
R	1	2	③	4	5	R
T	5	4	3	②	1	T
A	5	④	3	2	1	A
S	5	4	③	2	1	S

劣等感……自分の言ったことやしたことに自信がない。何んでも人よりよくできない。

自律性欠如……自分一人で考えたり決心したりできないで誰かに相談する。

根気づよさなし、落ちつきなし、注意散漫、少しのことで腹をたてておこる。

神経質、神経的習慣、神経症的徴候がある。

生活習慣……朝ねぼう、やりっぱなしでだらしがない、忘れ物が多い、物を粗末にする、ぐすぐずして時間をかける。不注意でそそっかしい。

以上観察結果、自己評価、性格検査による性格特性について相互の関連を考えると、劣等感が強いこと、神経質、非協調的な態度については、小学校・中学校とかわりなく；Y-Gテスト結果による性格特性をうらづける観察や自己評価が得られた。反社会性についてはY-Gテスト結果は普通ないし否定的であるのに反し、観察や自己評価は重くみているのである。なお、中学校にきて明朗になった、いろいろな人と気分的ではあるが接するようになったこと、はで好き、出しやばり、おせっかい、奇声、おべっかなどを総合して考えると、承認されたい欲求を満たそうとするためとも考えられるのである。本人が小学校で示した、わがまゝで興奮しやすく、自分の思うようにいかないと乱暴するような行動は、中学では相手になる生徒はなく、本人のわがまゝはとおらなくなったとみるべきであろう。こうして本人の性格行動は変わってきたのである。

本人の性格の特徴は情緒的未成熟で、健全な自我の成長が行なわれず、幼児的性格がいつまでも続いていたとみることができよう。要するに、幼少時の家庭教育の失敗による、不完全な社会性獲得ともいえる。しかし、ここには、教育による性格の再形成の可能性が残されている。

③ 家庭状況について

○家族構成 父(52) 船員で1年に数えるほどしか帰宅しない。

母(49) 子どもが小学生の頃は毎日外へ働きに出ていたが、現在家庭にある。

兄 4人のうち3人は別居、高校生の兄だけである。

本人 5人きょうだいの末子。

○生活程度 中流

○家族関係

幼児期——5人きょうだいの末子で甘やかされて育てられた。父親は本人の生れる前から船員で、1年のうち数日くらいしか帰宅していない。

小学校時代——母親は建築業者に雇われ、建築の手伝いをするため毎日でかけるようになった。父親の仕送りだけでは5人の子どもの養育は困難であったのである。しかし、家計はきちんとしていたし(児童委員の話)家庭内の整理整頓、清潔等はよく行なわれていた。子どもに対するしつけ方は甘やかしたかと思うとすぐ叱ったりして、気まぐれで一貫していなかった。とくに本人に対しては末子であるということで甘やかしていたが、非行を行なうにおよんで、何かと兄だけにつくし差別をした。小学校時代の担任教師の報告によると、家庭訪問で懇談の最中でも、教師の目の前で子どもを折かんし、教師はかえって母親をなだめる事に骨が折れたといっている。母親もいく分逆上の傾向があるということである。教師が子どもの導き方について母親と話し合う、すると母親は子どもに対して、いつも小言を言いがちになるのである。きょうだい関係では、メツツが立たないということで、4人の兄から何かにつけてしかられていた。

中学校時代——3人の兄たちが就職し、父親は相変わらずほとんど家庭にいない。現在母親、兄(3男で高校生)、本人の3人である。母親は外へ働きに出るのをやめた。これは兄たちが就職したし、本人のためにも家庭にいるのがよいと、相談した結果である。兄は勉強の指導だけでなく生活全般についてもアドバイスをしている。

父親から家族にあてた便りには、子どものことをいつも非常になつかしがりしており、子どもに関することが大部分である。帰宅する際には必ず土産品は欠かさなかった。本生徒の問題行動について、母親から数回にわたって知らせてあるのだが、だいたしたことはない、子どもは大きくなれば自

然に治まるものというような態度で実感をもってうけとめていなかった。

両親の養育態度を親子関係診断テストの結果で示すと表2のとおりである。

○母子関係で母親の態度に問題があるのは、

干渉(5Pt)、消極的拒否(45Pt)

厳格(30Pt)、不安(35Pt)

不一致(15Pt)

で過保護の態度である。

○父子関係では、父親が常時不在であり、

接することのできるのは帰宅中だけで、

したがって表層的な関係が多いことがう

かがわれ、その中でもとくに干渉(5Pt)

厳格・不安・不一致などが問題となる。

両親とも本人に対して保護的態度が強いこ

とである。子どもに対して心配・不安・恐怖

などを抱いている親は、しばしばその感情を

子どもを過度に保護することによって解消し

ようとする。本人の母親のように、逆上する

傾向にあって落ち着いて物事を処理すること

のできない態度のものに、本人の非行につい

ての心配や不安が重なって、過保護や厳格が

気まぐれに、しかも極端に現われてくる。母

親についてのしつけのゆがみは、この辺にあ

ったと考えられ、このゆがみを改善すること

によって子どもが立ち直ることができると思

われるのである。

④ 学校環境・地域環境について

小 学 校

学業成績 ・ 6年生の各教科の評価は「3」が大部分

学習態度 ・ 落ち着きがない。注意すると逆上することがある。成績がさがると非常にがっかりして、すっかり自信を失う。

交友関係 ・ 住居近くの遊び仲間ですれも非行化した子どもである。

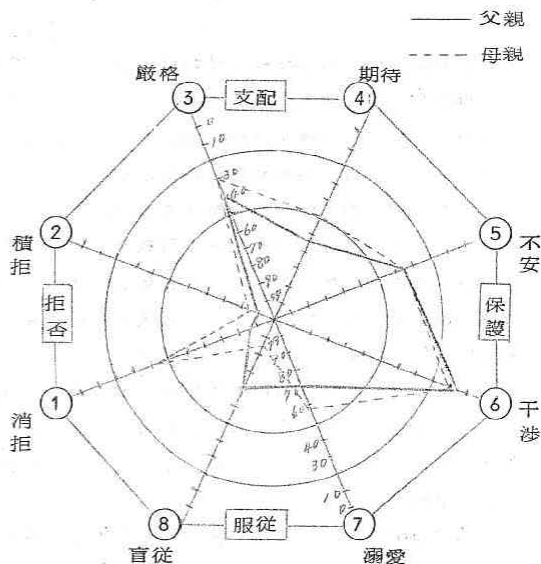
中 学 校

・ 中学1年では「2」が大部分

・ 他人と伍していく能力があるが努力がたりない。授業中落ち着きを欠く。勉強を嫌い宿題や割当てられた仕事をサボる。

・ 小学校時代の遊び仲間から離れる。本人は口が軽く、実行力もないのでグループのものから嫌われたことによる。しかし、反面他の生徒と気まぐれではあるが陽気に交わるようになった。

表2 親子関係診断テスト



型	父	母
矛盾型	55	55
不一致型	10	15

(3) 指導と考察

これまで小学校時代から中学校への成長のあとをたどりながら、いつ、何がどう変わったかを検討してきたが、ここではどのような指導がなされてきたか明らかにし、考察することにした。

① 母親のしつけ方が変わってきた。

逆上して落ち着いて物事を処理する態度に欠けている傾向が、教師の家庭訪問の場合にもよく見受

けられた。過保護・厳格の態度が気まぐれにあらわれていた。このような母親の態度は多分に性格的なものから出ていると考えられる。成人の性格を再形成することは至難なことだが、子どもに接する態度を変えることは可能である。小・中学校の担任教師はこの点について、たびたび母親と話合ってきた。子どものしつけで次のことを実行してもらっている。

- 感情的に子どもに接しないこと。子どもの言動にべったりついて、はいまわっているとどうしても感情的になり易いから、子どもとの距離を保ち、あるいは冷却期間を設けるなどして、子どもの言動を注意・禁止するよりは理解するように努力する。
- 末子であるからといって甘やかさないこと。家庭内の仕事を分担させること。
- 勉強中・仕事中はきびしくし、その他は親切に接する。
- 叱り方は自尊心に訴えるようにする。感情的にならない。

② 母親は外で働くことをやめて家庭でもっぱらしつけに当たった。

③ 兄がきょうだい愛にもえて、母を援け、本人を指導した。この兄は中学校時代学級のリーダーであった。勉強相手、遊び相手になってうまく本人をリードしている。本人はどもりである。兄も以前は軽いどもりであった。したがって弟の心の動きをよくは握ることができたのではなかろうか。相手の心をみながら、決して先走らない親切的指導である。

④ 中学校の担任教師として、とくに留意した点は、

- 何かと話しかけて本人の心をひきつけていた。
- 友人関係の指導では、本人がだれかれなく陽気に話しかけるので、気やすく交わるものが多いが、反面人にたやすく誘われやすい。交友関係に注意した。
- 学級内では一人一役割主義で、本人だけでなく問題生徒については毎日どうしても働かなければ学級全体が困るような役割を与え、本人をバン購入係とした。

⑤ 児童福祉司が毎土曜日、学校を訪問しては、本人の個別指導を小学校卒業までつづけたこと。これも本人を立ち直らせる上に大きな力をもったと考えられる。

考 察

この事例は、母親のしつけの型が、非行にはしりやすい性格をつくりあげるということ、そしてそのような性格と、非行をおこさせやすい環境的要因が結びついたとき、ここに非行が行なわれた例である。すなわち、父親は船員でほとんど帰宅しないので母親が生計の維持、子どもの保護・養育、そのために外へ働きに出たこと、加えて本生徒は末子であること、親子関係診断テストの結果で明らかであるように、母親は保護過剰であり、溺愛であり、気まぐれで矛盾した態度でもある。更に本生徒の地域環境は市内でも非行少年の発生率が多く、道徳的意義が低いのである。また本生徒の友だちはいずれも非行経験をもっていた。

本生徒を非行から守る最も基本的な問題は、母親が子どもに接する態度を改めることである。子どもに対する過保護、溺愛は正しい愛情の表現ではない。こういう母親の子どもは一般には自主性の成熟がおくれ、創造性に欠け、消極的であり、他人に対してはにかみやすいといわれている。そして、母親に対して抑圧されていた自己主張を、母親以外の者に向けて代償的に発散させるために、家庭外の友人その他に対しては、過度に自己顕示的となったり、攻撃的となったりする。かくて対人関係では、争いが多くなり、集団生活に適応しにくいことになったと考える。

B 非行グループを離れ、非行化傾向のなくなった生徒の事例

1. 地域ぐるみの助けあいで非行生徒を善導し更生させた事例

(1) 問題生徒 C男 15才 中学3年生 知能偏差値 49

小学校5年生頃から怠け出し、学業成績は急に落ちる。6年生の時、近所の店から多額の品物を単独または数人の友だちと数回にわたって万引し、警察に補導される。父親はなく、母親はバーで夜おそくまで働いている。〇を監督するものがないので、〇の生活は全く放任されたまゝである。金品を持ち出しては浪費し、夜おそくまでうろつき、不良グループに入って非行を重ねていた。中学生になってからは非行は認められないが、学習意欲が低調で他人の言動に左右される傾向がある。

非行少年の〇を善導し、〇の家庭を立ち直らせた力は地域ぐるみの助けあいであった。

(2) 問題点の分析

① 身体について

発育は標準以下、体格は普通以下、その他身体状況一般について異状は認められない。

② 性格および行動について

○指導要録、教師・親・児童委員（民生委員）などの観察を総合すると、

小 学 校

- ・ 何事も意欲がない。落ち着きがない。
- ・ 明るく、人によくなつく。
- ・ 素直
- ・ 内気で自我が弱い。

中 学 校

- ・ 上っ調子で、行儀がわるい。
- ・ 明朗で、お人よしである。
- ・ 他人の言動に左右されやすい。
- ・ 意志が弱い。

○矢田部・ギルフォード性格検査（Y-Gテスト）により性格の特徴を明らかにすると、

・ 類型・性格型 A' 型（準平均型）

・ I 劣等感大、C 非協調性、G 一般活動性 R のんき、衝動的な性質などが問題となる。

検査結果に関する限りとくに問題となる性格の特徴はないが、経済的不安定・父母の離婚

・ 母の不在・小学校の頃からのひとりぼっちの生活などを総合し考えると、I・C・G・R などの特性が意味をもってくる。

矢田部・ギルフォード性格検査プロフィール

D	1	2	③	4	5	D
C	1	2	③	4	5	C
I	1	2	3	④	5	I
N	1	2	③	4	5	N
O	1	2	③	4	5	O
Co	1	2	3	④	5	Co
Ag	1	2	③	4	5	Ag
G	1	2	3	④	5	G
R	1	2	3	④	5	R
T	5	4	⑤	2	1	T
A	5	④	3	2	1	A
S	5	4	③	2	1	S

○基本的欲求検査の結果

欲求傾向 場面	愛情の欲求 L	成就の欲求 A	所属と参加の欲求 B	独立の欲求 I	経済的安定の欲求 E	社会的承認の欲求 S	恐怖及び被害をさける欲求 F	罪をさける欲求 G	社会的見解の欲求 W	合計	段階 +○-
家庭 H		1		3	3	2	1	2		12	+
学校 Sch	(l)	(a)	(b)	(i)	(e)	(s)	(f)	(g)	(w)	8	-
社会 So	1	1	1	4	3	1	3	1	1	16	+
合計	1	5	2	7	6	3	5	6	1	36	
段階 +○-	-	○	-	+	+	○	+	-	○		
本人の欲求 順位	8	4	7	1	2	6	4	2	8		
中学3年の 欲求順位	7	2	4	3	6	8	5	1	9		

基本的欲求検査の結果から、欲求傾向を知り、問題行動が本人のどんな実質的な特質と環境条件のもとにかもし出されたものであるかを考察する。本人の指導上とくに問題となる欲求傾向は、E経済的安定の欲求、I独立の欲求が強いことである。欲求が強いということは、その項目について欠乏状態または不満と考えてよい。それには客観的にみて当然と思われるように条件のよくない場合と、主観的に本人がそう思っている場合とがあるが、どちらも指導上注意を要する。

経済的安定の欲求で○印をつけて反応した項目は、「私は、父母がしっかりした職業についておればよいと思う」「私は、家の人が貧乏のために苦勞しなければよいと思う」などが問題となり、独立の欲求では「私のおこないについて、家の人からあれこれと、いわれないようになりたいと思う」「私は、家の仕事をすると、じゅうぶんに私にまかせてほしいと思う」などが主な反応項目であった。

③ 家庭状況について

イ 家族構成

家族	年令	健否	学歴	職業、その他
母	39	健	小卒	バーの女給、父とは離婚
姉	19	〃	中卒	家庭にあって母代りの役をする
兄	18	〃		高校生
兄	16	〃	中卒	店員(住込み)
本人	15	〃		中学3年

※母親の結婚年令は19才で、20才からはほとんど毎年子どもを産んでいる。したがって養育の負担が大きかったと考えられる。

ロ 家族関係

幼児期—小学校—中学校へと家庭環境がどのように変わってきたかを明らかにするため、その要点のみを次表に示した。

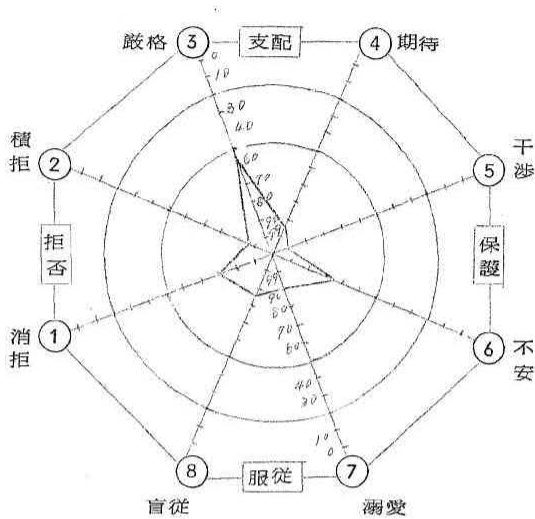
幼 児 期	小 学 校 時 代	中 学 校 時 代
<ul style="list-style-type: none"> 父親の酒乱、反道徳行為で家庭内に不和。 5才の時、父母がそれぞれ愛人をつくり家出する。子どもたち4人となる。 近所の協力によって母親は家庭に帰る。 	<ul style="list-style-type: none"> 10才の時両親は離婚し、母親は4人の子どもの養育に当たる。 母親は飲食店の女給として夜働きに出る。 生活保護をうける。 Cは不良の子どもと交わり、非行を行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> 母は外へ働きに出ているので、姉を母代りにCの監督に当たらせる。 長兄は高校生、次兄は店員として就職し住み込む。 母の意思で生活保護を返上する。目下準要保護となっている。

不幸な家庭生活をすでに幼児期に経験している。情緒的に健全な発達が阻害され、幼少時の家庭教育の失敗によりゆがんだ社会性を獲得していることがうかがわれる。しかし、教育による性格の再形成の可能性は残されているものとする。

親子関係診断テストにより、母子関係を次表に示した。

全く好ましい関係である。不一致で5P⁺となっているが、これは父親がいないのであるから不問に付して置く。

親子関係診断テスト



型	父	母
矛盾型		99
不一致型		5

④ 学校環境・地域環境について
指導要録の記載事項、学習状況の観察をまとめてみると

小 学 校	中 学 校	本人の意向
<ul style="list-style-type: none">・ 学業成績は各教科の評点 3・ 落ち着きなく常にきょうきょうしている。(5, 6年)・ 真剣さなし、宿題や割当てられた仕事はよく忘れる。	<ul style="list-style-type: none">・ 各教科の評点 2・ 学習意欲は全般に低調、注意散漫のため成績は振わない。・ 落ち着きがなく上っ調子である。・ 家庭では兄が指導している。	<ul style="list-style-type: none">・ 勉強がおもしろくない。・ すぐあきる。

小学校時代から学習意欲なく、授業中落ち着きがない、成績が振わないことから勉強に力を失い、学校に張り合いを失ったものと考えられる。

地域環境 住居は旧海外引揚者収容所の一間(8畳)を利用している。あらゆる点で不良住宅である。約100世帯が生活し、大部分が生活程度下である。問題児の発生も多い。

(3) 指導について

上記をまとめて非行化の要因として考えられるものをあげてみると

- 幼少の時期における家庭の破たん。(両親の家出、離婚前後の不安定な状態)。
- 貧しい生活、母親の深夜までにおよぶつとめ。
- 子どもの監督ふじゅうぶん、放任、無関心。(若年結婚、毎年のように出産、家庭生活の破たん 母親の深夜までにおよぶつとめ)
- 環境的要因の劣悪。
- 性格的要因として情緒的障害により健全な自我形成が行なわれていない。
- 不良グループの影響。

などである。そこで、本人に対する指導は、

① 町内会長や近所の人たちの助力。

本人の5才の時、父母がそれぞれ愛人をつくり家出し、子ども4人が残された。この事態について町内会長はじめ近所の人たちは子どもへの同情と親への義憤を感じて、あらゆる方法を用いて母親を探して連れ戻した。家庭生活のたてなおしのために助力を惜しまず、生活保護を申請してやったり、職業をあっ旋したりして、何かと母子の相談相手となり、めんどうをみてきた。

町内会長はまた、時々本人をさそってはレクリエーションの相手にしたり、一所に入浴したりしてその間にいろいろ善導した。母親の不在中は、結局深夜まで子どもは留守を守るわけであるが、たびたび近所の人たちなども家庭をたずねて激励してきた。暖い継続的な助力が更生させた一要因である。

② 教師の指導

必ずといってよいくらい毎日本人と話合った。本人は親とは話合う機会は少ないのである。良識ある成人と話合うことは本人にはとくに必要だったのである。非行生徒は親と話合うことが全く少ないのである。本人に対しては教務室に呼ぶようなことでなく、廊下で、清掃時で、10分休みで、自然の状態で話合った。交友関係についてもよく注意した。

③ 母親の家庭再建と子どもの養育への熱意。

生活保護にいつまでも頼らず自力で生活しようと、保護を返上した。

子どもが他人に迷惑をかけるようなことがあると、必ず子どもを伴ってあやまりにいった。（このようなことはこの生徒のいる地域社会では珍しいことである）。

仕事が深夜まで続くので、子どもの監督がうまくいかない。姉を家において母代りに監督させた。子どもの就職については、教師だけに頼らず、自分でも調査し、給料は安いがまじめで将来性のある事業所を選んだ。とくに事業所にいる人たちの生活態度を綿密に調べている。

④ きょうだい同志の協力

姉は母親に代って本人のめんどうをみた。高校生の兄は学習のよき相談相手となった。

家庭をみんなでつくるという考え方から、できるだけ負担を平等にしている。お互い、まじめに生活していることを認めあい、励ましあっている。

⑤ 本人の態度が明るく、素直で、人によくなつくから誰からでも気やすくされる。人の忠告や注意もよく守るのである。非行のなくなった要因でもあろう。しかし、「この子はたわいのない人間だ。もう一度育てなおさないと、心の入った人間にならないのではなからうか。」と、この生徒をよくめんどうをみている町内会長の意見である。規律ある生活の中できたえることが大切だということである。

(4) まとめと考察

この事例は地域の人たちの暖かい愛の手によって、家庭生活を立ち直らせ、非行生徒を更生させることに成功した例である。この事例をとおして気づくことは、

① 母親が親子関係の改善に努力し、卒先垂範の生活態度が生活の各所にでている。子どもの数が多く、生活のためには当然のことではあるが、破たんした家庭を再建することは容易のことではない。深夜まで働く母親の姿や態度が子どもにつよく影響を与えてきたと考えられる。

子どもの人格形成におよぼす母親の影響について、桂広介氏は次の二つをあげている。

a 母親の性格類型によって、母子の人間関係に、それぞれ独自の型が生じ、そういう人間関係の型が、その中で育てられる子どもの人間形成に影響する側面。

- b 母親の行動様式及び価値観が、子どもに模倣され、とり入れられ、そういうことを通して、子どもの人格形成に影響する側面。

親子関係診断テストによると、母子関係は好ましい状態であった。また観察報告によると母親の生活態度はしっかりしていたことがわかる。子どもが非行化傾向から立ち直った一つの要因でもある。しかし、幼児期・児童期は情緒性の発達に母親の役割りが重要であるのに、しつけがじゅうぶんなされていなかった。したがって健全な自我の成長が行なわれず、要求不満に対する自己統制がどのように働くかということ。次に、幼児・児童期における母親の行動は、子どもにとって模倣の対象であり、同一化の対象であるが、現在の彼にはむしろ母親を批判的にみる傾向になりつつあるのではなかろうかということ。これらが今後どのように作用していくかが残された課題でもある。

② 近所の人たちの善意が、ともすると崩壊せんとする親子関係を支えた。親のいない留守をあずかる子どもたちを励まし、レクリエーションにさそったりして、心の結びつきをつよくしていた。悪友にさそわれたり、夜あそびし、再び不良グループに戻る余地を与えない、他人のつけこむすきをみせない、近所の人たちの助力で本人を更生させたのである。

不良グループの解体は非常にむずかしいといわれている。寸断されたかに見えても油断すると一緒になる。グループに対する指導はやはり学校・家庭・地域などが協力しないと成功しない。グループは極めて連帯意識が強い、かえってこちらが各個撃破をうけることもあるので、指導に当たっては組織には組織という態度で当たるべきと考える。

2. クラブ活動で善導し更生させた事例

(1) 問題生徒 D男 15才 中学3年生 知能偏差値 55

小学校の頃から単独または数人とともに、盗みを行なってきたが、昭和37年7月15日午後3時頃同級の非行グループのメンバー3人に誘われて、住居附近の食料品店で万引したのを皮切りに、翌年2月頃まで数人（構成はその都度変わっている）で、万引または留守がちの住宅に入り空巣を行ない、現金および物品など総額約20万円に達した。この事件は長期にわたって非行が行なわれたが、非行事実が陰べいされ、たまたまグループの一員が集団非行以外の問題で補導された際に明るみにでたものである。このグループは学級委員長（小学校では児童会長であった）をリーダーとし、主として小学校時代の友だち、または住居附近の同学年・同級生で構成された約10人のグループである。成員は知能の高いもの、中流家庭のものが多く、グループの一員を通して成人・高校生・工員で構成されている非行集団にも連なっていた。

Dは補導後家庭や学校の熱心な指導により、グループから離れ現在にいたるも非行事実はない。

(2) 問題点の分析

① 身体について

乳児期から現在にいたるまで発育順調で、体格もすぐれ、身体状況で特別異状は認められない。野球部正選手である。

② 性格および行動について

指導要録や教師の観察によると

小学校	内気で劣等感も大きい。人前に出ると顔が赤くなり、話がうまくできない。
中学校	言語・服装・態度がみだれている。よくない友だちと行動を共にする。（1年）
	温順・まじめ・自制心が強く・責任感旺盛（3年）
	3年生になってから落ち着きを増し、性格もおだやかになる。（親の観察）

矢田部・ギルフォード性格検査の結果では

類型：性格型 A' 型（準平均型）

だいたい調和のと

れた型。

抑うつ性：劣等感が大きい。人と協調し
ないなどの点が目立つ。

物事を客観的に見る。 服従的である。

矢田部・ギルフォード性格検査プロフィール

D	1	2	3	④	5	D
C	1	2	③	4	5	C
I	1	2	3	④	5	I
N	1	2	③	4	5	N
O	1	②	3	4	5	O
Co	1	2	3	④	5	Co
Ag	1	2	③	4	5	Ag
G	1	2	③	4	5	G
R	1	2	③	4	5	R
T	5	4	③	2	1	T
A	5	④	3	2	1	A
S	5	4	⑤	2	1	S

基本的欲求検査の結果では

欲求の種類 場面	愛情の欲求 L	成就の欲求 A	所属と参加の欲求 B	独立の欲求 I	経済的安定の欲求 E	社会的承認の欲求 S	恐怖及び侵害をさける欲求 F	罪をさける欲求 G	社会的見解の欲求 W	合計	段階 +○-
家庭 H	L	A	B	I	E	S	F	G	W	9	○
学校 Sch	(l)	(a)	(b)	(i)	(e)	(s)	(f)	(g)	(w)	14	+
社会 So	l	a	b	i	e	s	f	g	w	13	-
合計	1	4	3	2	11	5	5	5	○	36	
段階 +○-	-	-	○	-	+	+	+	-	-		
本人の欲求 順位	8	5	6	7	1	2	2	2	9		
中学3年の 欲求順位	7	2	4	3	6	8	5	1	9		

（注） 欲求傾向の問題点

- 1 特定の欲求が異常に強い場合。たとえば成熟の欲求とか、愛情の欲求が異常に強い場合。
 - 2 特定の欲求が異常に弱い場合。たとえば独立の欲求とか、所属の欲求が特に弱い場合。
 - 3 特定の事態における欲求が異常に強かったりする場合。たとえば中学3年の少年が、家庭事態での欲求が異常に強く、社会事態での欲求がほとんどないような場合。
 - 4 欲求間に強弱の差が少なく、ほとんど同程度に表現されている場合。たとえば、成就の欲求も、愛情の欲求も同程度で、欲求全体が一様な強さ、又は弱さとして示されている場合。何故ならば、正常な人格の発達の場合には、或程度の欲求の分化と不均衡がむしろ正常であるからである。
- 以上四つの場合には異常な場合である。その由って来る所以を追求していくことが大切である。

矢田部・ギルフォード性格検査の結果で注意すべき点は、劣等感が大きいことである。教師の観察も一致している。劣等感は家庭生活や学校生活の場で顕著のようである。基本的欲求検査で経済的安定の欲求や社会的承認の欲求と関連をもたせて考えると、一層はっきりするのである。すなわち、「私は、自分の家が友だちをつれてきてても恥かしくないくらいであればよいと思う」「私は、先生のいわれるものが、何んでも買えるくらいお金があればよいと思う」「学校の友だちと一緒に野球や映画を

みにゆけるほど小遣いがたくさんあればよいと思う」「友だちが私のしていることは、いつも正しいと思うようになりたいと思う」という欲求になって表われているのである。次に非協調性・抑うつ性の大きいことである。非行グループから離れ、まじめな友だちへ接近し、現にまじめな友だちと仲間になっているのだが、これまで非行グループにいたということでもかなり罪悪感・劣等感などをもっていることが推察できるし、こんごいかに克服していくかが問題である。

基本的欲求検査結果で問題となるのは、経済的安定の欲求・社会的承認の欲求・恐怖及び侵害をさける欲求などが強く、独立の欲求・成就の欲求などが弱い欲求となっている。本生徒の家庭は貧しく生活保護をうけていることから、経済的安定の欲求が強いということはずけることである。恐怖及び侵害をさける欲求も「私は、自分の家がもっと金持であればよいと思う」と答えているように、経済的なことがらについての欲求である。社会的承認の欲求では、自分の正しいことを認めてもらいたいという生き方についてである。次に独立・成就の欲求が弱いことは逆にいうならば、ある程度満たされていることである。父親は長いこと不在であり、幼い弟妹が多いことから、家庭における本人の役割と責任が大きいことも影響しているのではなかろうか。どういう事態に関して強い欲求があるかについてみると学校・家庭・社会の順である。一般的にいうと学年の上昇とともに家庭よりは学校学校よりは社会と順に強くなる。本生徒は社会でマイナスとなっている。

③ 家庭状況について

a 家族構成

父(35)不在中、母(33)内職しているが最近外へつとめに出たい希望あり、弟妹3人
 父母は若年で結婚し(20才,18才)、翌年本人は誕生する。

b 間借で6畳1間に5人(父は不在)が生活。混雑しているが清潔・整理整頓などに気を配っている。

c 家族関係

両親は若年で結婚し、終戦後の社会的混乱の中で子どもを養育した。本人が3才頃すなわち妹が生まれるまでは共稼ぎであったが、その後は母親はつとめをやめて家庭に入る。父親は反道徳行為のため本人の小学生の頃に不在となる。

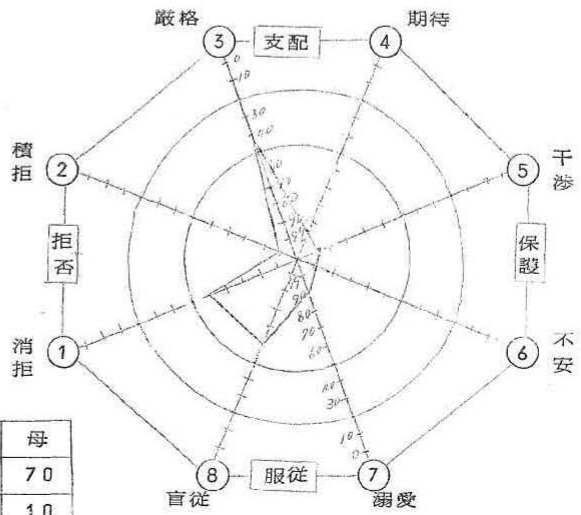
母親の養育態度(田研式親子関係診断テスト)

厳格については準危険な関係で40

Ptとなっているがとくに問題にしないともよい。

不一致で10Ptで危険な関係である。しかし、現在父親は不在であるので、しつけに対する意思の疎通がうまくいかないこともあるのではないだろうか。

親子関係診断テスト



型	父	母
矛盾型		70
不一致型		10

ここで家庭状況について考察を加えると、

- 父親の反道徳行為及び不在ということが本人の人格形成にどのような影響を与えているかが問題である。両親の非行そのものが子どもに受けつがれるものではないが、非行をおかしやすい性格的な特徴の形成は遺伝の影響を受けるものと考えられる。それに小学校5・6年頃からは父親への同一化のはたらきが行なわれ、自我を形成する大切な時期であるが、父親の行動様式・価値観・人生観などがある程度受け入れられ、非行形成へ結びついたり、非行以後の更生に作用しているものと考えられる。
- 両親の結婚年齢が若く、しかも子どもが次々に生まれている。(このたび調査研究の対象になった生徒の両親について、結婚年齢を調べてみると20才前後の若年で結婚した例がかなりある。グリュック氏のいうように、情緒的な成熟は必ずしも肉体的年齢と関連性をもったものと断定できないけれど、年の功を欠いたまま世帯をもったことは争えない。)

生活に追われ、しつけがじゅうぶんだったとは考えられない。

- 経済的貧困家庭であり、常に経済的安定について劣等感や欲求不満をもっていたことも非行へ走らせた一つの要因と解する。
- ④ 学校生活について

中学3年生になって生活態度が明らかに変わってきた。

- 学業成績 各教科の評価は3, 体育 4, 学年の模擬テスト $\frac{101}{580}$ 位
- 学習態度 まじめに努力する。緊張感あふれる態度。学習意欲大きく、確実に成績をあげている。
- クラブ活動 体育部正選手で、放課後や休日は練習に時間を費し、遊ぶひまもない。
- 交友関係 非行グループとは全く手を切っており、部員と交際している。

(3) 指導と考察

- 担任教師の指導 毎日一回は面接している。とくに父親が不在であること、幼い弟妹が多いこと、長男である本人がしっかりしなかったら一家は破滅することなど、くり返しくり返し語って、またかといわれてもなお話合った。3年生であるから、もし以前のように非行が行なわれると、就職はむずかしい。現在の成績でがんばれば、一流会社へ行けるかもしれないことを、先輩の例などを引用して激励した。3年1学期の中間テスト以来成績はぐんと上昇している。学級内での位置を安定させるため、掲示係にし、活動の場と機会を与えてやった。

- クラブ活動 野球部正選手である。連日計画されたスケジュールでこなされる。部内の秩序、ルールを守る態度と習慣、摂生、猛練習などは本人のゆがんだ生活態度を是正するチャンスでもあった。また、連日放課後おそくまでの練習で遊ぶ時間がなかった。非行グループと手を切るよい機会であった。市内大会で優勝したことは、自分の生き方に自信を与えたことと考えられよう。

- 母親の態度

- ・ 父親が不在中であり、子ども4人もかかえて生活は困難だが、それによく耐え、家庭生活の維持、家計や家庭生活の日課にはよく気を配っている。生活に真剣に立ち向かう態度が子どもにも模倣され、とり入れられ、自我形成に影響している。
- ・ しつけ方もしっかりしていて親切である。本人を信頼し、母親のよき相談相手にしている。
- ・ 父親の不在、貧しい生活など家庭状況はよくないが、精神面で補い、楽しい雰囲気でお互い助け合い、協力し合っている。

Ⅲ まとめと考察

非行の予防に関しては、非行の原因を究明することが、直接に解答を準備してくれる場合がまことに多い。非行予防、不良化防止とは非行以前、不良化以前の働きである。しかし、現に非行を行なった生徒や不良化傾向にある生徒に対しては、非行以後、不良化傾向以後の指導の問題がある。もちろんそれらの生徒に対して、予防的な探究が施され、効果のある面も少なくない。しかし、原因探究をいくら深めても、傷つけられた心はもとに復さないし、更生に関しては他になすべきことが多いのである。非行を行なった生徒、不良化傾向にある生徒の更生は過去にさかのぼっての原因探究よりは、未来への善導である。再び非行を行なわないようにする教育の問題である。

これまで若干の事例についてかなり深く問題点を探り、どのような指導が行なわれたかについて述べてきた。最後に総括的に指導の方法についてふれることにする。

I 家庭において

(1) 問題生徒を立ち直らせる家族のチームワーク

家族にチームワークのとれていないことは、子どもの心のよりどころを失なわせ、混乱した道徳観や自己中心的な考えを育てることになるから、家族の心の結合を常に強く作る工夫を必要とする。これまであげた事例で、チームワークのないことによっておこった問題点は、家族の暖かさや思いやりがない、親や他のきょうだいに対する親しみや尊敬がない、家族の希望や行動のきまりをほとんど考えないで行動する自己中心的な態度等であった。チームワークを強くするためにとられた方法として

- ① 話し合い、団らんの機会を何んとかくふうして作っている。子どもと顔をあわせるといつも小言が先立つ親の接し方を改めていく。そのため夕食時に話し合いをして、お互いの立場や考え方を理解してもらった。言いたいことも言われなくて、内向し不意に変形して爆発する親子の問題が非行生徒に多いのである。
- ② 家庭第一主義をとり、家庭の自尊心や希望を強めていくことによって、家族の心のおきどころを安定にし、方向づけを与える。不利な家庭状況を精神面で補うため、団らんや話し合いなどいろいろ努力とくふうを重ねている。
- ③ 何んでも相談し、相談させる態度、一つのことを家族みんなで考えるようにした。とくに進路の問題については何回も話合っている。
- ④ 親が子どもについてえこひいきしないこと。とくに末子で非行のあるものに対しては、過保護や溺愛傾向がある。末子を甘やかさないことが兄弟間の安定を図るもとになる。
- ⑤ 母親がユーモアをよくいって家族間、とくに非行ある子どもと家族間の緊張をやわらげたこと。非行のある子どもの親はユーモアに乏しい。どなるとき、小言を言うときぐらいしか子どもと接触がない。非行生徒に表現力が乏しいのは親の精神的貧困によることも考えられる。

(2) あらゆる生活の場に関心を向ける

子どもに対する親の無関心と監督の不行届は、子どもの環境への不適応性と不良化への主要な原因となる。子どもに無関心な親は子どもに対してじゅうぶんな養護を与えないし、適時適切な監督や指導を欠くのである。日本では他人の子どもに対しての関心は一般に低いから、親が自分の子どもに無関心であると子どもは全く放置されるのである。子どもに無関心な親をどう改善していくかはむずか

しい問題である。その原因をつきつめると社会生活のしぐみに深く関連しているからである。

非行以後の子どもに対する関心や監督が具体的には

- 子どもに家事を分担させ毎日日課として行なわせたこと。
- 親が不在中、子どもの行動にじゅうぶん気をくばったこと。勝手な行動をとらせないこと。親が帰宅後必ずといってよいくらい留守中のことについて問いただしたこと。
- 子どもの夜間外出を厳しくいしめたこと。不良グループの呼び出しには主として親が応対したと。
- 友人関係にも注意し、教師とよく連絡をとったこと。
- 不良化を防ぐことは金に代えられないとして共稼ぎをやめた母親、母親代りに姉を家庭において母親の不在中監督させたことなど、不良化を防ぐため家庭の一部を犠牲にしている。
- 子どものあやまちについては些細なことでも、いい加減にしないこと。ある母親は子どもを連れてあやまりにいつている。

(3) まず、子どもに安定感を与える。

子どもに対する愛情、養護、親の人格、親の権威等について子どもに疑問や、恐怖を起こさせないことである。子どもに安定感を与えることである。事例についてみると、

- 離婚後の家庭再建のため何事も卒先垂範したこと。
- 子どもを平等にとりあつかったこと。末子の甘やかし、できのよい子とわるい子の差別等はさけたこと。
- 静かな態度で子どもに接し、叱る場合、大声でどなりちらすのではなく静かに納得のいくようにしたこと。
- 子どもの立場を理解し、信頼することにつとめ、卒業後の進路について積極的に相談相手となったこと。
- 父親のいない家庭では家庭の運営について母親のよき相談相手にしたこと。
- 子どもに対するしつけの態度を両親間で一致するよう努力したこと。

(4) 子どもの道徳観をつくる親の生活態度。

親子関係をみると干渉型の親が多いのに注意したい。一般に子どもに対する指導が目先のことにとらわれて、家庭教育が技術の末に走っている状態である。干渉するとかえって子どもは反抗し親から離れて、親は一生懸命に不良化防止に努力しているが、子どもは親の思うようなことにはならない。子どもの行く方向は、直接指導よりも親自身の生き方にある。親自身がどう生きているか、何を目標にしているかによってきまると考える。事例でみると、

- 父なきあとの母親の家庭再建と子どもに対する養護の態度が真剣であったこと。
- 両親の激しい働きぶりを見て子どもが家事に協力し、生活態度を改めたこと。
- 両親が日常の生活態度に注意し、家庭生活のスタイルをつくりかえるよう努力したこと。すなわち家庭の日課をしまりがあるようにしたこと。
- 子どもの前で、他人をののしったり、子どもの友人に対して干渉したり、教師に対して不平不満をいったりしないこと。また、人との話しぶりには気をつかったこと。
- 家庭内の清潔、整理整頓に留意したこと。
- 是非の判断を明確にしたこと。

(5) 子どもの性格形成は基本的な生活習慣をとおしてつちかわれる。

事例をとおして気づくことは、当然幼児期に身につけておくべき睡眠時間、食事、排便、勉強、あそび等が中学生になってもできていないことである。家庭生活全般にしまりがなく、規則正しく日課がくりかえされていない。非行を行なった生徒の生育歴をみると、幼少時の親の扱い方の間違い、基本的習慣とか生活訓練についてじゅうぶんなされていないことが目立つ。

II 非行生徒を更生させた教師の指導

主として担任教師の指導に限って触れることにする。非行のある生徒はほとんどといってよいくらい学校生活に張り合いをもっていないことがわかる。実際、彼等は家庭についてはいろいろ積極的に要求をもつが、学校に対しては要求が少ない。これは満足しているというよりは無関心、あきらめと考えた。学業不振と不成績、学校生活全般についての不適応は、他の条件よりもいっそう非行と深い関係があると考えられる。担任教師がどんな指導をしてきたか、直接的に問題生徒を指導した場合と間接的に学級経営の中での指導について事例をとおして考えてみる。

(1) 愛情と規律と忍耐が大切。

いずれも非行生徒にだまされ、裏切られ、それでも彼らを信じ、容認し、愛しつづけた教師、自分を信じ、指導法に改善を加えていった情熱が更生させたものである。

- ・生徒に対して目を離さず、常に教師の心のきずなに結びつけておく。このことは生徒に安定感をもたせるに大切なことである。非行生徒の指導は矯正指導でもある。それ故に、
- ・1日1回(放課後)話合いをもち、前日の家庭生活の様子や学校生活について反省をきく。
- ・校内外で生徒を見かけたら、すぐ話しかける。
- ・合言葉をつくったり、約束をきめたりする。

話合うことには、二つの意味をもつ。一つは話合いすることによって考える訓練をすることである。非行生徒は考えることが苦手である。思いつきのまゝ言い、思いつきのまゝ行動している。自分がこう言うのと相手はどう反応するかを考えない。次は話合いによってコミュニケーションをよくすることである。非行生徒は話のし方、自分の思っていることをどう表現してよいかわからない。相手に理解してもらえず、「頭にきた」ということで粗暴な行動をとるのである。家庭では親が話合ってくれない。彼等の話合いの場は限られた不良仲間の中であった。

- ・毎日所持品を検査し、爪、ハンケチ等を調べる。学校の規則、生徒会や学級のきまりは必ず守らせる。
- ・日記、反省記録、前日の生活記録(生活時程)などを書かせる。
- ・必ず家庭学習をやらせる。家庭で学習がむずかしい時は放課後教師がついてやらせたり、教師の自宅に呼んでやらせた。学習の結果を必ず点検することにした。

非行生徒の生活態度は、だらしがなく、不規則で、行き当たりばったりである。

更生の最初の問題は彼等の生活を規則正しくすることである。単純なこと、簡単なことで生活を規制し、習慣化している。

- ・是非を明白にする。彼等に対する態度があいまいだと、生活全般に対して反目、無視、無統制にでる危険がある。学校を休んだことがわかったら直ぐ迎えに行ったし、問題をおこしたら直ぐ話合った。彼らは家庭生活というものがどんなものかわかっていない。教師はたびたび教師の自宅に呼ん

で、遊ばせたり食べさせたりしている。また食堂で食べさせている。彼らは大食である。この過程で彼等の緊張感をときほぐし、信頼感をもたせている。

(2) 残された可能性をのばす。

彼らのほとんどが授業中落ちつきがなく、私語が多く、机間をうろついたり、自分勝手な行動をして他人の迷惑を考えていない。これは自己中心的な考え方や生活態度が強いからである。自己中心の心理は承認の欲求のあらわれである。他人に認められていれば安定するのである。一般に問題生徒の健全育成は彼らのひとりひとりの個性を活かし、無用な劣等感の防止につとめることである。自信をもたせ残された可能性をのばし、自我を再構成し、自己指導の道に通ずるものでなければならぬ。

- 役割を与え責任をもたせる。学級の係り、作業、スポーツなどで役割を与え実践活動をさかんにすると共に、とくに怠けることによってクラス全員がめいわくをうけるような（例、パン購入係）、毎日必ずやらねばならないような（例、出席係、げた箱整理係）役割を与えた。
- 劣等感をなくするため、小さい善意をとりあげてはげまし、日常生活での成功の経験を味わせた。
- 家庭における彼らの地位や役割りについて何回も話合う。
- 彼らの先輩や同境遇の人たちで同じような問題をもち更生した人たちの例について話合う。

(3) 家庭との連絡を密接に。

問題があってもなくても常に電話や手紙や家庭訪問で密接に連絡をとったこと。1～2回の家庭訪問は子どものお客さまがきたくらいにしか考えない親、子どもは自分のことでスパイにきたと疑う例もある。真実はなかなか話さない。この障害をこえて教師―父母―子どもの通路ができていく。事例の生徒の教師は根気よく訪問し、その間に一片の希望を探り当てたのである。教師―父母―子どもの通路ができたからといって、子どもの言い分、親の言い分をきいておれば、子どもは更生するかというとしてそうではない。ここで失望してはいけないのである。

Ⅲ 地域ぐるみの指導

非行生徒の更生に当たって、学校、家庭、地域社会、子どもの問題に直接関係をもつ機関等の協力を得なければ効果は上がらないことはいうまでもない。非行グループは巧みに非行を陰べし、計画的に非行を行なっている現状であるから、更生指導に当たっては細かい網の目をはって相互に連絡をとりながら根強くすゝめていくことが必要である。

(1) 留守をあずかる子どもへの励まし。

親の不在中不良グループのたまり場となる。悪事の計画、喫煙、飲酒、不良とのつきあいは公然となされている。親は知らないし、近所で注意し合うことは日本の社会ではなかなか実行できない。

「わが子に限って……」ということになる。子どもの非行は悪友の誘いによるとしか考えないし、不良化防止について地域で話し合いをもっても進んで参加しようとしなない。わが子の問題は親の手だけで解決しようとしてますます問題を大きくしている。非行ある子どもの更生および不良化防止の障害はここにもある。こういう場合教師、児童委員（民生委員）、補導委員等の働きかけがしばしば好転させている。事例でみるように

- 親の不在中、とくに夜間に訪ねては注意したり激励する。
- 非行のある子どもをさそってレクリエーションを楽しむことや、浴場へいったりして、この間にいろいろ話合っている。

・定期的に親や子どもと話し合いをもっている。

(2) PTAと校外補導

不良化防止で各機関が独自に活動していた状態を是正し、協力体制をつくっていく、たとえば児童委員(民生委員)からPTAの補導部員になってもらう。定期的に話し合って早期発見、更生補導等を研究する、など意図的・計画的・組織的・有機的活動が必要である。

おわりに

同じような知能をもち、同じような生活環境にありながら、あるものは非行化し、あるものは非行化しない。なぜ子どもは非行をするのか、その原因はどこにあるのか。この根本的問題を究明するため、昔からたゆみない研究が続けられ、いく多の学説が展開されてはいるが、現在これといった定説はない。

非行は人間の一つの行動であるという意味から、素質と環境との相互作用によっておこるものとして理解することができよう。非行の原因について環境的条件にふれず、人格的条件の中から求めてみるならば、先ず第一に性格を問題として取りあげることができる。子どもの性格の形成に最も大きな影響を及ぼすものは家庭であろう。家族との人間的な接触を通じて自己の行動のし方とその基準をつくりあげていく。もしも、家族関係とくに親と子の人間関係が好ましくない場合は、子どもの性格形成に悪い影響を及ぼすことは諸家の研究によっても明らかであり、そのような人間関係の中で成長した子どもは、わずかの誘因によって容易に非行へ走りやすい性格となるであろう。したがって、非行化した子どもと非行化しない子どもの性格特性の間には何らかの差異が考えられ、この差異の究明こそ本質へ迫る手がかりとなるものではなかろうか。

このような考えのもとに、非行化した生徒と非行化しない生徒の性格特性を「矢田部・ギルフォード性格検査」で分析し、比較検討した結果、両者の性格特性には差異のあることを認めた。続いて「親子関係診断テスト」により親子の関係を調査したのであるが、初め予想したように、非行化した生徒の親子関係は、非行化しない生徒にくらべ、好ましくない状態にあった。更に、非行化した生徒の性格特性と親子関係との間には密接な関連があることを発見することができた。

次に非行化した生徒の更生指導について研究協力校から貴重な資料を提供してもらった。非行化した生徒の更生指導は長く忍耐を要することは、改めていうまでもない。心の中に閉ざされた可能性をほりおこし、伸ばしていくことが大切なのである。これは、更生指導にかぎらず、一般に不良化防止の重要な指導上の着眼点でもある。

終わりに、この研究について、各位のご指導、ご批判をお願いするとともに、この研究調査にあたり終始積極的にご支援ご協力をいただいた研究協力校の校長先生をはじめ諸先生ならびに関係諸機関の各位に対し深く感謝の意を表するものである。

(研究執筆者 梁 取 威)

参 考 文 献

- | | | |
|------------|----------------------------|---------------|
| 伊 東 博 | 「カウンセリング」 | 誠信書房 |
| グリユック夫妻 | 「少年非行の解明」 | 政府刊行物サービスセンター |
| 文 部 省 | 「問題青少年の理解と指導」 | |
| 上武正二・辰野千寿編 | 「非行生徒の心理と指導」 | 新光閣書店 |
| 法務総合研究所 | 「犯罪白書」(37・38) | 法務省 |
| 中央青少年問題協議会 | 「青少年白書」 | |
| 安 倍 淳 吉 | 「社会心理学」 | 共立出版 |
| 山 根 清 道 | 「犯罪心理学」 | 〃 |
| 樋 口 幸 吉 | 「少年非行」 | 紀伊国屋書店 |
| 〃 | 「非行少年の心理」 | 大日本図書 |
| フリードランダー | 「少年不良化の精神分析」 | みすず書房 |
| 津 留 宏 | 「家族の心理」 | 金子書房 |
| 戸川行男ほか | 「性格心理学講座」(2・3・4) | 〃 |
| 鈴 木 清 編 | 「学校における問題児」 | 日本文化科学社 |
| マカレンコ | 「愛と規律の家庭教育」 | 三一書房 |
| 雑 誌 | 「児童心理」(38年7・11・12号) | 金子書房 |
| 〃 | 「人間の科学」(38年10月) | 誠信書房 |
| 研 究 紀 要 | 「子どものための教育相談」(39) | 新潟県立教育研究所 |
| 〃 | 「青少年の不良化防止に関する基礎的研究」(58) | 大阪府県教育研究所 |